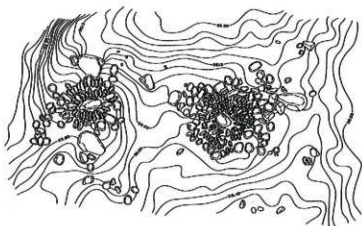


西崎山ストーンサークル



重要遺跡確認調査報告書 第1集

2001

北海道立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（シン技術コンサル提供）



遺跡遠景（シン技術コンサル提供）



1 2区の配石（手前1号・奥2号 南東から）



2 昭和34年当時の2区の配石（手前1号・奥2号）久保資料



3区1群の配石 (シン技術コンサル提供)



1 3区2群の配石（北から）



2 3区2群北の配石（南から）



3 3区2群南の配石（南から）



1 4区 未調査の配石遺構（北西から）



2 4区 未調査の配石遺構（西から）

発刊にあたって

遺跡は現状で保存し、活用することがもつとも望ましいが、歴史的に見ても遺跡を現状のまま保存することは困難なことから、保護対策として国、都道府県、市町村のそれぞれにとって重要な遺跡については、文化財保護法、文化財保護条例等で史跡に指定するなどして保存、活用が図られてきている。

このような史跡指定などの保護対策が講じられている状況のもとで、二十世紀後半の高度経済成長下で、公共事業はもとより、宅地開発等の各種大規模開発の増大に伴い全国的に数多くの貴重な遺跡が破壊の憂き目にあってきている。

文化財保護法によって、開発計画地内に、埋蔵文化財包蔵地がある場合は、開発事業者と事前協議を行い、事業者の理解と協力を得て開発計画の変更等により保存が図られているが、開発計画の変更が困難な場合は、開発に先だって記録保存のための発掘調査が行われ保存対策が講じられている。

現状は記録保存のための発掘調査の途中や工事中に重要な遺構が発見される場合もあり、その場合、遺跡保存のために止む無く工事を中断し開発計画を変更したり、中止せざるを得なくなったりして開発計画に支障を来とし、大きな社会問題ともなっている。

これらの問題をできるだけ回避するための方策として、文化財保護側で遺跡の範囲や性格を把握し、重要な遺跡については史跡に指定するなどして事前に保存措置を講じておく必要がある。そのために、全国的に埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査が行われ周知化を図るとともに重要な遺跡の確認調査などが計画的に行われている。

北海道においても、これまでに埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施してきたところであり、また市町村においても独自に詳細な分布調査が行われてきている。このたび道立埋蔵文化財センターの設置に伴い、道立センターの調査研究事業の一つとして、重要遺跡確認調査を位置付けたところである。

北海道教育委員会では、市町村の協力を得てあらかじめ50箇所の重要な遺跡を選択し、一期5ヵ年計画で遺跡の範囲、性格を確認するための調査を予定している。調査の方法は、遺跡の範囲、性格を把握するため試掘、測量等を行い、これらの成果は今後史跡に指定し保存、活用を図る場合や開発計画との円滑な調整を図るための基礎資料として活用を図ることにしている。

重要遺跡確認調査は、平成12年度から事業に着手し、今年度は小樽市と余市町の境界にあり一部が道史跡に指定されている西崎山ストーン・サークルの範囲と性格を確認するための、試掘、測量調査を実施したので、ここにその成果を報告するものである。

当該報告書が多くの皆様方に活用され、当該遺跡の重要性の理解が深められ、今後遺跡の保存、活用のための一助となれば幸いである。

北海道立埋蔵文化財センター
所 長 大 澤 満

例 言

1. 本書は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが北海道教育委員会から委託を受けて、平成12年度に実施した、重要遺跡確認調査報告書である。
2. 今回調査を行なった西崎山ストーンサークルは、北海道小樽市と余市町との境界に位置し、北海道指定史跡「西崎山ストーンサークル」はこの一部にあたる。
3. 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センター第1調査部普及活用課と第1調査課が担当した。
4. 報告書の作成は、普及活用課村田大が編集を担当し、執筆については文末に記した。
5. 岩石の同定は1部1課の花岡正光が担当した。
6. 報告書作成にあたり、伊達市教育委員会が保管している峯山巖氏資料と余市町教育委員会が保管している久保武夫氏資料を拝見させていただき、一部写真を借用した。使用にあたって、それぞれ「峯山資料」「久保資料」と記している。
7. 発掘調査の記録類及び出土資料は、余市町教育委員会で一括して保管する。
8. 調査にあたって、下記の機関及び人々のご協力、ご助言をいただいた。

大蔵省北海道財務局小樽出張所、小樽市教育委員会、余市町教育委員会、仁木町教育委員会、倶知安町教育委員会、伊達市教育委員会、小樽市博物館、峯山富美、久保菊子、竹田輝雄、佐藤利雄、藤 繁美、西崎保子、中野 勇、田中嘉一郎、深浦 実、菊地弘雄、北島和人、成田千代直、三間 馨、小俣良弘、清橋聖子、木露國雄、石原イシ

凡 例

1. 本文では、2区から5区まで、調査地区ごとに報告している。
2. 方位は、真北を表示し、方位にNを付した。縮尺は、図ごとにスケールで表示している。
旧報告からの転載については、当時の方位をそのまま使用し、Nを付していない。スケールに誤りがあると認められるものについては、本文中に断って変更している。
3. 層位は地区ごとに大きく異なるため、調査地区ごとに記載した。

目 次

カラー図版	
発刊にあたって	
例言・凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の目的	1
4 調査の概要	2
5 調査の成果	4
II 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
2 西崎山ストーンサークルの調査歴	5
3 遺跡周辺の地形・地質	10
III 調査の方法	13
1 調査基準点の設定	13
2 調査の方法	14
IV 2区の調査	17
1 2区の調査歴	19
2 2区の調査	19
3 2区の遺物	20
V 3区の調査	21
1 3区の調査歴	21
2 3区の調査	27
VI 4区の調査	29
1 4区の調査歴	29
2 4区の調査	29
3 4区の遺物	34
VII 5区の調査	35
1 5区aの調査	35
2 5区bの調査	35
3 5区cの調査	39
4 小活	39
むすびにかえて	40
西崎山配石一覧表	41
引用・参考文献	42

写真図版	43
報告書抄録	65

挿 図 目 次

図I-1 調査地区	3
図II-1 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
図II-2 過去の調査位置図	8
図II-3 遺跡周辺の地形分類図	11
図II-4 礫の断面写真	12
図III-1 測量基準点網図	15
図III-2 調査区別測量基準点位置図	16
図IV-1 2区の調査歴	17
図IV-2 2区の配石遺構実測図と遺物	18
図V-1 3区の配石位置図と調査範囲	22
図V-2 3区1・2群の調査歴	23
図V-3 3区1群の配石遺構実測図	24
図V-4 3区1群の主な配石遺構	25
図V-5 3区2群の調査状況	26
図VI-1 北海道大学調査の位置	30
図VI-2 北海道大学調査実測図	31
図VI-3 4区の地形	32
図VI-4 配石遺構実測図	33
図VI-5 4区の出土遺物	34
図VII-1 5区aの地形とトレンチ	36
図VII-2 5区bの地形とトレンチ	37
図VII-3 5区cの地形とトレンチ	38

表 目 次

表I-1 出土遺物一覧	4
表III-1 調査基準点測量結果一覧	13

図 版 目 次

図版1 西崎山ストーンサークル遠景	
1 遺跡遠景（北から シン技術 コンサル提供）	
図版2 遺跡の空中写真	
1 遺跡周辺の状況（平成12年撮影 小樽市教育委員会提供）	
図版3 遺跡の空中写真	
1 遺跡周辺の状況（昭和22年撮影）	
図版4 2区の調査	
1 2区の配石（上2号、下1号）	
図版5 2区の調査	

- 1 昭和38年整備時の2区1号配石（峯山資料）
 - 2 昭和38年整備時の2区2号配石（峯山資料）
- 図版6 2区の調査
- 1 昭和39年？の2区の様子（峯山資料）
 - 2 昭和39年発見の2区a号配石（峯山資料）
 - 3 久保武夫氏（左）と峯山巖氏（右）（峯山資料）
- 図版7 3区の調査
- 1 3区1群の配石（北西から）
 - 2 3区1群の配石（北から）
- 図版8 3区の調査
- 1 3区2群の配石（北から）
 - 2 2群配石下のトレンチ調査（南から）
 - 3 2群配石下土層（東から）
 - 4 2群南の配石（南から）
 - 5 2群南の配石（南南西から）
- 図版9 3区の調査
- 1 3区2群北の配石（南から）
 - 2 3区3群の配石状況（南から）
 - 3 3区3群の配石状況（南から）
 - 4 3区1群調査前の状況（西から）
 - 5 3区から5区へ（北から）
- 図版10 3区の調査
- 1 昭和38年整備時の3区1群配石（峯山資料）
 - 2 昭和39年？の3区1群配石（久保資料）
- 図版11 3区の調査
- 1 昭和38年1群3号配石（峯山資料）
 - 2 昭和38年1群5号配石（峯山資料）
 - 3 昭和38年1群10号配石（峯山資料）
 - 4 昭和38年1群6号配石（峯山資料）
 - 5 昭和38年整備時の3区1群の配石（久保資料）
- 図版12 3区の調査
- 1 昭和54年当時の3区2群配石『餅屋沢墳墓群について』より
 - 2 昭和54年当時の3区2群Cn墳墓『餅屋沢墳墓群について』より
- 図版13 3区の調査
- 1 参考資料 黒川砂丘
- のストーンサークル（久保資料）
- 2 参考資料 黒川砂丘のストーンサークル（久保資料）
- 図版14 4区の調査
- 1 蘭島地区遠景（4区より）
 - 2 北大調査区現況（北から）
- 図版15 4区の調査
- 1 北大調査区確認状況（北から）
 - 2 北大調査区確認状況（北西から）
- 図版16 4区の調査
- 1 南側未調査区現況（南東から）
 - 2 北大調査時に確認された配石遺構（西から）
 - 3 北大調査時に確認された配石遺構（南西から）
- 図版17 4区の調査
- 1 今回確認された配石遺構（北西から）
 - 2 今回確認された配石遺構（北西から）
 - 3 今回確認された配石遺構（東から）
 - 4 今回確認された配石遺構（南西から）
- 図版18 5区aの調査
- 1 5区aの調査
 - 2 5区a C トレンチ礫
 - 3 5区a F トレンチ礫群
 - 4 5区a 南側の石組み
- 図版19 5区bの調査
- 1 5区bの状況
 - 2 5区b K トレンチ断面
 - 3 5区b I トレンチ礫群とホタテ貝
 - 4 5区b N トレンチ礫
 - 5 5区b K トレンチ礫群
- 図版20 5区cの調査
- 1 5区c 礫群
 - 2 5区c 石組み
 - 3 5区c Q トレンチ
 - 4 5区c R トレンチ礫

I 調査の概要

1 調査要項

調査名：小樽市・余市町西崎山ストーンサークル重要遺跡確認調査

遺跡名：小樽市西崎山ストーンサークル（道教委登録番号 D-01-64）

余市町西崎山ストーンサークル（道教委登録番号 D-19-4）

地番：北海道小樽市蘭島2丁目240-2番地ほか、余市町栄町853番地ほか、国有未開地

調査期間：平成12年9月25日～10月25日

調査面積：140㎡（試掘部分のみ）

2 調査体制

理事長	大澤 満	専務理事	宮崎 勝
第1調査部 部長	木村尚俊		
普及活用課 課長	越田賢一郎	第1調査課 課長	立川トマス
同 主査	藤本昌子	同 主査	花岡正光
同 主任	村田 大	同 主査	田口 尚
同 文化財保護主事	愛場和人	同 主任	倉橋直孝
		同 文化財保護主事	富永勝也

3 調査の目的

小樽市西部から、余市町、仁木町に広がる丘陵地帯には、ストーンサークルと呼ばれる石を組み上げた特殊な遺構が数多く存在することが知られている。現在国指定史跡となっている忍路環状列石、道指定史跡地鎮山巨石記念物、余市町八幡山遺跡、仁木町モンガク B 遺跡などで、今回調査を行った道指定史跡「西崎山ストーンサークル」もその一つである。

これらの遺跡が注目されたのは、古く江戸時代末期にまで遡るが、本格的な調査は、戦後、東京大学駒井和愛教授による発掘を待たねばならなかった（駒井1959）。

西崎山ストーンサークル周辺は、昭和25から27年にかけて調査され、日本における巨石記念物の一つとして、昭和26年9月6日に道史跡に指定された（1区、地区名は峯山・久保1965『西崎山』に準じており、図1に位置を示している）。このほか、南側の尾根伝いに現在の3区、西側の丘陵上に配石（2区）が発見され、それぞれ駒井教授によって調査が行なわれている。また、丘陵の海側にあたる地区（4区）においても、昭和43・47年に北海道大学による調査が行なわれた（大場・重松1977）。

その後、昭和38年に峯山巖と久保武夫によって、2区の1・2号配石と3区の配石の整備と測量が行なわれた。また、翌39年には2区と同じ丘陵上にある3基の石組が調査された（峯山・久保1965）。その後も小規模な調査は行なわれたようであるが、正式の報告書がなく、調査の実態が明らかになっていない。また復元された遺構も林の中に埋もれ、保存整備の跡もはっきりしなくなっている。

一方隣接地では、農地の造成や農道工事などが行なわれ、景観が大きく変化してきている。昭和63年には、広域農道の工事に関連して、西崎山ストーンサークルに隣接する余市町栄町5遺跡で、財団法人北海道埋蔵文化財センターによる発掘調査が行なわれた。縄文時代晩期末葉の墓域群が検出され、土器・石器等が出土している。縄文時代中期・後期の土器はわずかである。この調査では、西崎山ス

トーンサークル2・3区の再確認を行ない、報告書で各地区の調査経過をまとめている(長沼1990)。

平成になって、この地区の広域な史跡保存整備・活用計画が立てられ、ストーンサークル群の見直しが行なわれるようになった。このなかで小樽市では忍路環状列石と地鎮山巨石記念物の範囲確認調査、余市町では八幡山遺跡の調査などが実施された。平成9年には、北海道教育委員会、小樽市と余市町が共同で、西崎山ストーンサークル一帯の尾根筋踏査を行ない、3区の奥に500m以上にわたり礫群が残されていることを確認し、5区とした(田才ほか1999、小樽市教育委員会1999)。

今回は、平成9年の調査で明らかになった礫群が、西崎山ストーンサークル群(1・2・3・4区を合わせて群と呼ぶことにする)と関連があるものかどうか確認することを主目的とした。また、発掘から年月が経ち、1区を除く各区の様相が不明確になっているため、その状況を再確認することも合わせて行なった。

重要遺跡確認調査は、今後遺跡の保存・活用を図るための情報を得ることを第一義としており、遺跡の広がりやの確認が重要な意味をもっている。そこで、主体部については、これまで発掘調査が行なわれており、ある程度遺構の形態が明らかにされていることもあって、過去の調査の再確認に留めた。

4 調査の概要

1区：道指定地であり、保存が図られていることから、今回は調査を行なわなかった。

2区：配石のある部分を残し、周囲で畑地造成が行なわれたため、大きく景観が変わっている。今回は配石の位置の再確認を行ない、現在の状況を把握することを目的とした。1・2号配石は、胸井が発掘調査した後、埋め戻しを行なって石組を復元しており、その後峯山らが整備した状況で残っていることが確認できた。しかし胸井が3号としたもの、峯山らが発見したa・b・c石組は見つけることができなかった。現在、3区の崖下に円礫がまとまって投棄されており、これらの一部であったかと想像される。

3区：峯山らが整備した余市側の配石(1群、群の名称は長沼(1990)による)を写真測量した。その結果、一部が当時の図面と合致しないことが明らかとなった。その理由は不明である。

小樽側の礫群(2群)は、5ヶ所のまとまりが認められたが、いずれも扁平礫が横倒しになり、窪地に置かれていることから、既に調査された可能性があるため、細いトレンチをいれて確認した。その結果、既に調査が行なわれていることが明確となったが、報告書は出されていない。今回の調査で、木の根元及び現在の礫群の下部で、未調査と判断できる配石を検出した。全面調査が行なわれたものではなく、周辺には未調査の石組がまだ残存しているものと判断される。

2群については、昭和54年に小樽市立忍路中学校忍路理科クラブによって簡単な実測調査が行なわれている。その図は現在の状況そのままであることから、この調査は少なくともそれ以前に行なわれたものであることがわかる(忍路理科クラブ1979)。

最も北側の一群(3群)は、新たに並べられたものもあり、表土のものが多く、全体の様相がはっきりしない。木の根元にある程度まとまった石組が見られるが、遺構と関連したものかどうか明確でない。

4区：大場らにより昭和43・47年に調査が行なわれた地区である。下草を除去した段階で、当時の発掘調査範囲とグリッドの釘が確認できたので、今回の測量図に入れることができた。また南側の未調査地区に大型の礫がまとまっていたため、表土層を若干掘り下げて、礫の配列を確認した。その結果いくつかの小規模なまとまりが認められ、配石遺構であると判断した。周辺から縄文時代後期中頃と晩期の土器片、黒曜石の剥片が出土している。

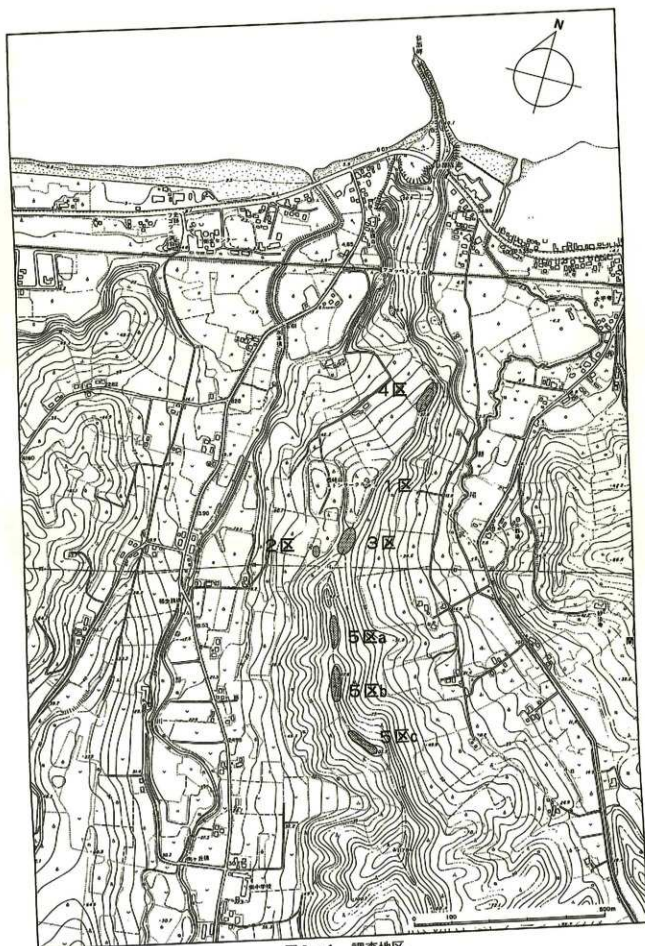


図 I-1 調査地区

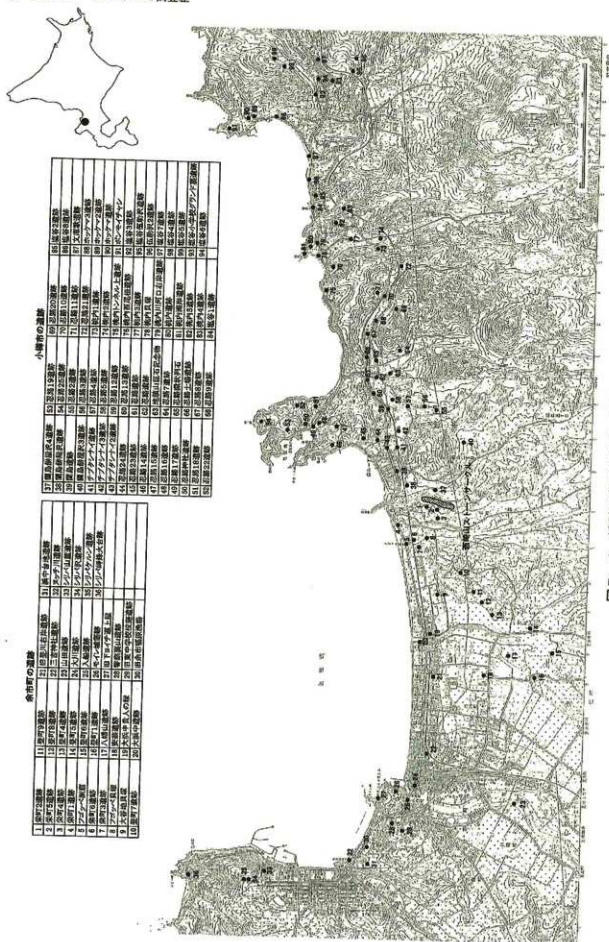


図 II-1 遺跡の位置と周辺の遺跡

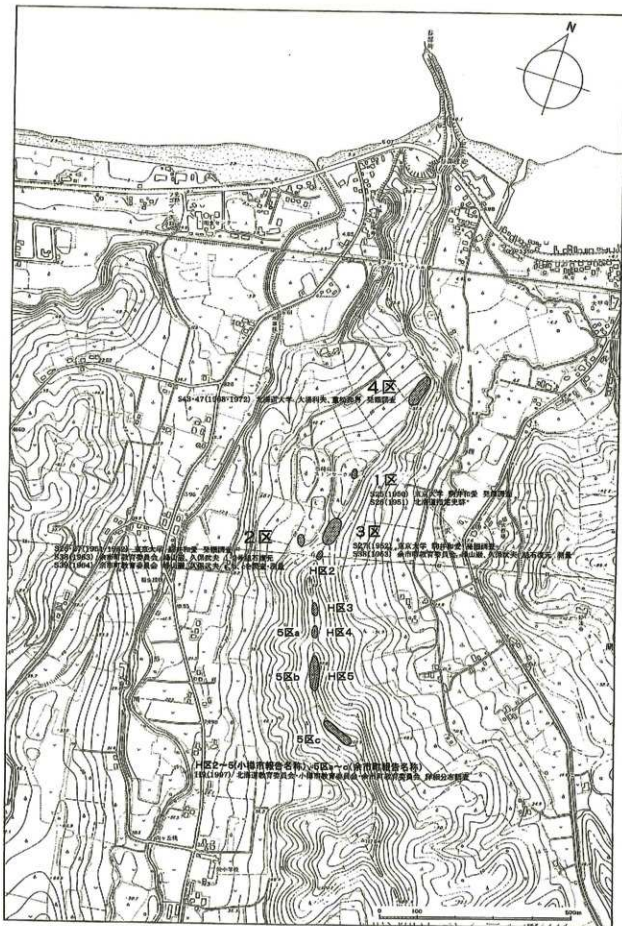
- 1925 (T14. 10) 河野常吉 踏査
- 1950 (S25. 9. 25~10. 5) 東京大学 駒井和愛「発掘調査」1区
1区 道指定史跡
- 1951 (S26. 9. 6) 東京大学 駒井和愛「発掘調査」2区2号、3号発掘
- 1951 (S26. 9. 26~29) 東京大学 駒井和愛「発掘調査」2区1号、3区の特殊石組
- 1952 (S27. 10. 6~10) 東京大学 駒井和愛「発掘調査」2区1号、3区の特殊石組
- 1963 (S38. 7. 28~30) 余市町教育委員会 峯山巖・久保武夫「2区と3区の整備」
- 1968 (S43. 10. 25~11. 10) 北海道大学 大場利夫・重松和男「発掘調査」4区
- 1972 (S47. 9. 26~29) 北海道大学 大場利夫・重松和男「発掘調査」4区
- 1979 (S54. 5~7) 忍路中学校忍路理科クラブ 「測量・ボーリング調査」3区小樽側
- 1984 (S59. 8. 29) 北海道教育委員会 大沼忠春「所在確認調査」
- 1984 (S59. 10) 北海道教育委員会 木村尚俊・矢吹俊男「範囲確認調査」
- 1985 (S60. 7. 2~4) 北海道教育委員会 矢吹俊男「範囲確認調査」
- 1985 (S60. 9) 北海道教育委員会 越田賢一郎「一般分布調査」(余市側)
- 1985 (S60. 11) 北海道教育委員会 矢吹俊男「一般分布調査」(小樽側)
- 1986 (S61. 9. 4~5) 北海道教育委員会 森田知忠・矢吹俊男「所在確認調査」
- 1986 (S61. 9. 24~27) 北海道教育委員会 矢吹俊男「範囲確認調査」
- 1987 (S62. 5. 11~16) 北海道教育委員会 矢吹俊男「範囲確認調査」
- 1988 (S63. 6) 北海道埋蔵文化財センター 「栄町5遺跡発掘調査」2区、3区再確認
- 1997 (H9. 4) 北海道教育委員会 田才雅彦「所在確認調査」
- 1997 (H9. 11. 10~15) 北海道教育委員会・小樽市教育委員会・余市町教育委員会 田才雅彦・青木誠・乾芳宏「詳細分布調査」5区

遺跡の様子が紹介された最も古いものとして、河野常吉による大正14年10月の踏査がある(宇田川校注 1981)。ストーンサークルのあった場所について「其頂上を境界とし、境界線は幅二十間(二間の誤りか)を官地として保存し・・・」、「甚だ、緩なる傾斜を成せり」とあり、ストーンサークルの石については「径一尺以上の石も二十余個あって・・・」と記されているので、おそらく1区のことであろう。

戦後になって昭和25年から東京大学の駒井和愛が忍路環状列石、ニセコ町北栄遺跡、深川市音江環状列石など一連の調査の一貫として、西崎山ストーンサークルの調査を行っている(駒井 1959)。昭和25年は1区の発掘調査を行い、東西11m、南北17mの範囲のストーンサークルを確認した。南側に径1~2mの小型のものが7基(I~Ⅶ)あり、そのうち形状の明らかなものは4基(I~Ⅳ)で、いずれも小環状列石内に川原石や割石の積石があり、その下に深さ70cm前後の穴があると報告している。遺物は第4号(Ⅳ)敷石の間から縄文時代後期の土器が出土している。この1区は翌昭和26年9月に道指定史跡となった。

駒井は引き続き昭和26年と27年に2区の調査を行っている。2区は「先年調査した西崎山ストーン・サークルのあるところから澤一つ越えた西方丘上」(駒井 1952a)、「環状列石群のあるところから、小さい沢を越えた西方の台地、つまり西崎山の裏」(駒井 1959)といわれているところで、第Ⅰ号(I)~第Ⅲ号(Ⅲ)の3基の組石を確認し、第2号と第3号を調査している。組石の下に墓竈などは確認できなかった。第1号に関しては昭和27年に調査を行い、組石・立石下に墓竈とみられる穴を確認している。

2 西崎ストーンサークルの調査歴



図Ⅱ-2 過去の調査位置図

駒井は昭和27年に3区の調査も行っている。「西崎山の南方の林のなか」(駒井 1952b)、「西崎山の南の丘」(駒井 1953)、「西崎山裏の立石のあるところからさらに南に行った雑木林の中」(駒井 1959)、といわれている場所に相当する。この調査で3基の立石遺構(第1～3号)を確認しているが、詳細は不明である。第3号の写真のみが掲載されている(駒井1952b・1959)。

昭和38年5月に2・3区の一部が破壊されたことが確認され、同年7月に余市町教育委員会が主体になり峯山巖、久保武夫を担当者として、2・3区の復元整備を行っている。

2区は第3号が消失しており、第1・2号は上部に石塊が山積みの状態であった。これを昭和26・27年調査時の写真をもとに復元した。この作業の際、第1・2号の北方に石積みを3ヶ所(a・b・c)確認している。このうち石積み(a)を翌昭和39年に調査・実測し、日時計型の組石遺構であることが報告されている。

3区は実測図の入手ができなかったこともあり、現状での「石塊の集石」を測量し、1～14号を設定、さらに移動がない立石、寝石についてナンバリング(No.1～No.13)を付した後に、浮き石を除去し、組石の形態をあらわす整備を行っている。この整備時に発見した遺構と遺物は以下のとおり。

- 1 特殊組石(日時計型のもの) 3・4・6・10号、No.7の5基
- 2 サークル状に並列する立石 No.10・3・6・9・8の5個の立石
- 3 寝石のみの組石 2・5・11号の3基
- 4 ビット (P-1～3)
- 5 後世の移動による集石 1・7・8・9・12号
- 6 遺物 「石鐮の形態を示す」石製品2、「人面状を呈する石製品」1、「石砥様の板状のチャート」1

昭和43年10～11月、昭和47年9月に1区の北側で、北海道大学大場利夫・重松和男による4区の調査が行なわれた。5基(第1～5号)の組石遺構が調査され、2種類に分類している。第1～3号は組石下に浅い皿状の土壌を伴うもの。第4・5号は第1～3号よりは深い土壌を伴い、立石を中心に石を縦または斜めにつめ込んだものである。遺物は、第1号から土器片1点、第2号から土器片10数点、石鐮1点、第3号から4個体の小型土器、第4号から小型の完形土器1個、第5号から石鐮1点が出土している。土器はいずれも縄文時代後期中葉のもので、5基の組石遺構と同時期のものと考えられている。

昭和54年に3区の小樽側(「餅屋沢墳墓群」と呼ぶ)を忍路中学校忍路理科クラブが、測量とボーリング調査を行っている。

昭和59年から昭和62年にかけて、北海道教育委員会による「一般分布調査」と「所在確認調査」・「範囲確認調査」が数度にわたって行われた。後者の調査は広域農道建設に伴う調査で、その結果、昭和63年に隣接する栄町5遺跡、平成元年に寿部川対岸のフゴッベ貝塚の発掘調査を当センターが行っている。最近では、小樽市で忍路環状列石、地鎮山巨石記念物周辺の分布調査が、余市町で八幡山にあるストーンサークルの確認調査が行われている。これら一連の調査の流れで、平成9年に北海道教育委員会・小樽市教育委員会・余市町教育委員会の合同で、3区の南側(5区)の詳細分布調査が行われた。現在、周辺には自動車道等の開発計画があり、今後は、遺跡保存との調整を図って行く必要がある。

(村田)

3 遺跡周辺の地形・地質

(1) 地形と地質の概要

図Ⅱ-3に遺跡周辺の地形分類図を示す。周辺では、丘陵、沖積低地、砂丘、海浜が認められる。

丘陵は丘頂高度50~100mで、丘麓では緩斜面をなすことが多い。猪木・垣見(1954)の上部集塊岩層から成り、3区付近の露頭では、安山岩の礫、岩塊とその間を充填する粘土分の多い砂礫物が認められる。この安山岩は斑晶として粗粒の斜長石を頗る多く含み、見かけの長径が10mmに達するものがある。石基部分は黒色を呈する。礫、岩塊の間の充填物は赤褐色を呈している。

沖積低地は、沓部川と餅屋沢川沿い、及びそれらの河口付近に発達している。沓部川の現河床には丘陵構成物と同質の安山岩の円礫、餅屋沢の現河床には流紋岩の亜円礫が認められる。

海岸部には砂質海浜が発達し、フゴッペ洞窟から西方へは砂丘が認められる。

今回の調査地区は、2区は丘陵、その他の地区は丘頂部に位置している。

(2) 集石の礫

集石に用いられている礫は、表面観察では安山岩と推定されるが、礫の表面は風化していて、表面観察のみでは詳しく岩石名を調べることはできない。

3区と4区の集石礫のうち、十数個の断面を見る限りでは安山岩であった。断面観察では安山岩には大別して二種類があり、一つは丘陵構成物や沓部川で認められるものと同質の、斜長石斑晶が大きくその量が多いもので、他の一つは、斑晶は斜長石であるが細粒で、石基が黒色で極めて堅硬なものである。前者をA型安山岩、後者をB型安山岩とすれば、A型は円磨度が低く角礫~亜角礫のものである。礫の形態は不定形が多い。B型は円磨度が大きく、礫表面は非常に平滑である。礫の形態は、長柱状、短柱状、厚い板状で、完円礫に近いものもある。A、B型とも灰白~灰褐色の風化殻(厚さ1mm±)を有している。

A型の礫は集石地付近で容易に入手可能である。B型の礫は基盤(地山)である丘陵構成物中には見られず、丘陵外から持ち込まれたものと考えられる。円磨度の大きさから、海岸部で入手可能であろう。

図Ⅱ-4に集石の礫と周辺から採取した礫の断面写真を示す。4を除き、礫断面を研磨剤アラウンドで#2000まで研磨したものを実体顕微鏡で撮影した。4はさらに薄片にしたものを偏光顕微鏡(下方ポーラーのみ)で撮影した。写真で柱状~不定形の白く見える鉱物は斜長石である。ただし、2の斜長石は輝石類を取り込んでいる。また、4の割れ目が入った鉱物は斜方輝石である。

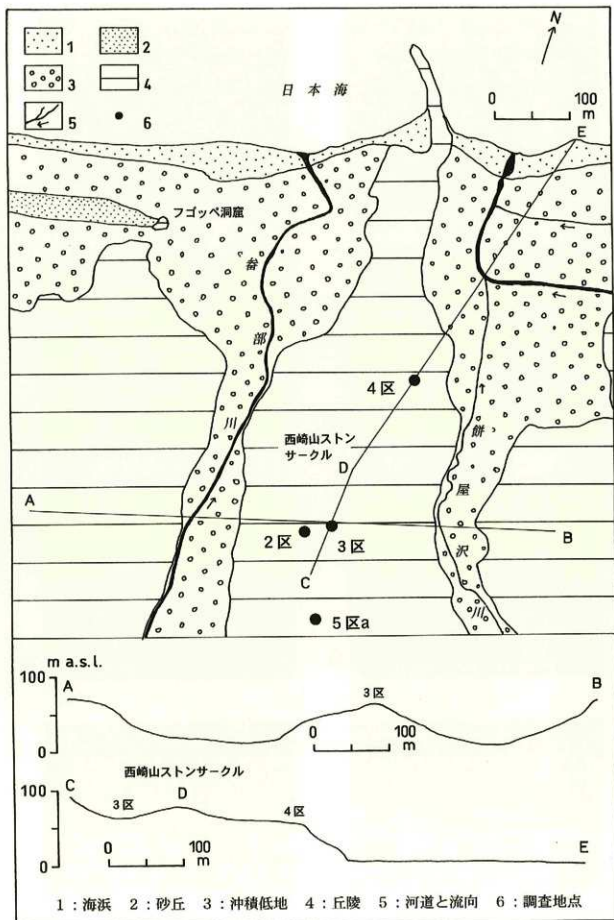
1~3は3区の集石の礫である。1と3はB型の安山岩で堅硬である。2はA、B型とも異なる安山岩で、断面は灰色である。4は3の薄片写真である。斑晶は斜長石と斜方輝石である。石基部分の微粒の針状結晶は斜長石で、流状組織を呈する。8は餅屋沢川の河口の西方海浜中に露出する堅硬な安山岩で、1と3に似ている。

5は丘陵構成物の礫で、A型の安山岩である。6は沓部川下流の現河床礫で、5によく似る。

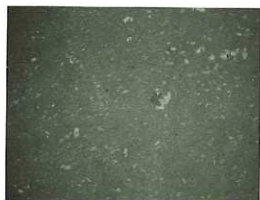
7は余市市街の北方にあるシリバ岬の安山岩岩脈(猪木・垣見, 1954)の南端で得た岩石である。断面は明灰色を呈し、斜長石の他、少量の角閃石、石英を含んでいる。

今回の調査ではサンプル数が極く少ないが、集石礫の原産地を推定することがある程度可能である。加納ほか(1987)は、西崎山ストンサークルの列石の原産地はシリバ岬の安山岩岩脈としているが、今回調査した地区にも持ち込まれているかは今のところ不明である。

(花岡)

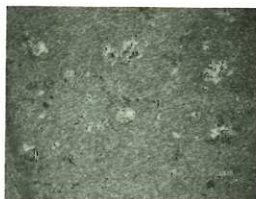


図Ⅱ-3 遺跡周辺の地形分類図



1

1mm



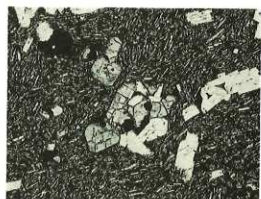
2

1mm



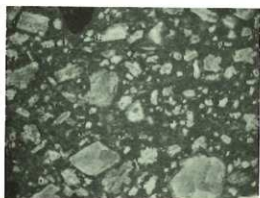
3

1mm



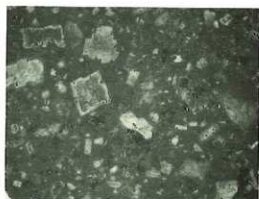
4

0,25mm



5

1mm



6

1mm



7

1mm



8

1mm

図Ⅱ-4 礫の断面写真

III 調査の方法

1 調査基準点の設定

調査の主な目的は、2・3・4区で、過去に調査が行われた場所を確認し、現状把握のための測量を行うとともに、配石の範囲を確定することであった。また、5区は礫群の性格を把握することを目的とした。遺跡が細い尾根上に立地するため、調査区全体を覆うような発掘区は設定しなかった。そこで、各調査区に任意の4級基準点を設置し（図Ⅲ-1）、そこから5mもしくはその倍数の位置に調査基準点を設けて（図Ⅲ-2）調査を行った。各基準点の測量結果を表Ⅲ-1に示す。なお、座標系は平面直角座標系X I系を用いた。

表Ⅲ-1 調査基準点測量結果一覧

4級基準点				調査基準点			
座標点名	X座標	Y座標	調査区	座標点名	X座標	Y座標	調査区
T-1	-89909.242	48259.226		A-1	-90192.660	48770.038	3区
T-2	-90118.597	48740.055		A-2	-90207.304	48766.789	3区
T-3	-90501.643	49683.089		A-3	-90212.185	48765.706	3区
T-4	-90371.750	49848.021		A-4	-90209.470	48776.552	3区
H11-94	-89286.692	48922.157		A-5	-90204.055	48752.145	3区
H8-112	-89480.173	49025.047		B-1	-90414.643	48797.712	5区a
TA-1	-90147.755	48762.969		B-2	-90434.049	48802.551	5区a
TA-2	-90168.913	48755.307	3区	B-3	-90453.454	48807.391	5区a
TA-3	-90215.485	48764.974	3区	C-1	-90535.570	48831.559	5区b
TA-4	-90264.646	48752.920		D-1	-90568.032	48836.931	5区b
TA-5	-90294.051	48756.659		D-2	-90582.937	48838.618	5区b
TA-6	-90353.670	48766.029		E-1	-90684.926	48921.996	5区c
TA-7	-90400.089	48794.082	5区a	E-2	-90692.512	48940.501	5区c
TA-8	-90460.202	48809.074	5区a	E-3	-90700.098	48959.007	5区c
TA-9	-90492.145	48813.104		E-4	-90707.684	48977.512	5区c
TA-10	-90525.759	48829.622	5区b	F-1	-90238.787	48699.501	2区
TA-11	-90555.706	48835.536	5区b	F-2	-90245.919	48692.490	2区
TA-12	-90602.810	48840.867	5区b	G-1	-89795.391	48869.510	4区
TA-13	-90651.338	48883.350		G-2	-89781.472	48875.102	4区
TA-14	-90681.133	48912.743	5区c	G-3	-89762.914	48882.559	4区
TA-15	-90706.464	48974.535	5区c				
TA-16	-90710.961	48998.196					
TB-1	-90115.014	48781.011					
TB-2	-90075.266	48777.156					
TB-3	-90041.389	48770.614					
TB-4	-90014.062	48780.418					
TB-5	-89872.364	48852.786					
TB-6	-89831.059	48869.697					
TB-7	-89809.309	48863.917	4区				
TB-8	-89737.031	48892.960	4区				
TC-1	-90136.612	48717.305					
TC-2	-90235.221	48703.006	2区				

2 調査の方法

調査は2・3・4区は過去に調査が行われた場所を確認し、配石の範囲を明らかにするために写真撮影と測量作業を行った。5区の各区は、礫群の内容を確認するためにトレンチ調査を行った。以下各区ごとに簡略に記す。

2区：調査時の現況は高さ1.5m程の笹などの雑草が繁茂していた。笹刈りを行った後、4級基準点(TC-2)を設置し、尾根上の南東方向に調査基準点(F-1・2)を設置した。周辺の地形測量と写真撮影、配石1・2号の写真実測を行った。

3区：丘陵上のほかの調査区に比べ、広い平坦面が広がっている。現況は雑木林で、下草はそれほど多くない。南北に2点の4級基準点(TA-2・3)を設置し、この基準線上に3点の測量基準点を設けた(A-1~3)。草刈と落ち葉除去を行なった段階で、調査区内に3つのまとまりの配石群を確認し、これらを網羅するため、南北の基準線に直行する形で2点の測量基準点を設置した(A-4・5)。

3区の主体である余市側のまとまりは、昭和38年に峯山らによって復元整備が行われたもので、写真撮影と現状の図面作成を写真実測で行っている。

小樽側では、扁平な川原石を円形に集石したものが5ヶ所認められたが、すべて腐植土の上に乗っており、原位置を保っていないと思われたので、トレンチ調査を一部で行った。その結果、これらの礫群は後世に掘り起こされ、それが埋め戻されているものであることが確認された。また、周辺を精査した結果、未調査の配石を2ヶ所確認した。これらの実測図を作成し、3区全体の地形測量を行っている。

4区：昭和43・47年に北海道大学大場らによって調査が行われた地区である。現況は雑木林となっており、高さ1m程度の雑草が繁茂していた。草刈り終了後、4級基準点を調査区の南北両端に設置し(TB-7・8)、南側のTB-7から15m、30m、50mの位置に調査基準点として、G-1~3をそれぞれ設けた。

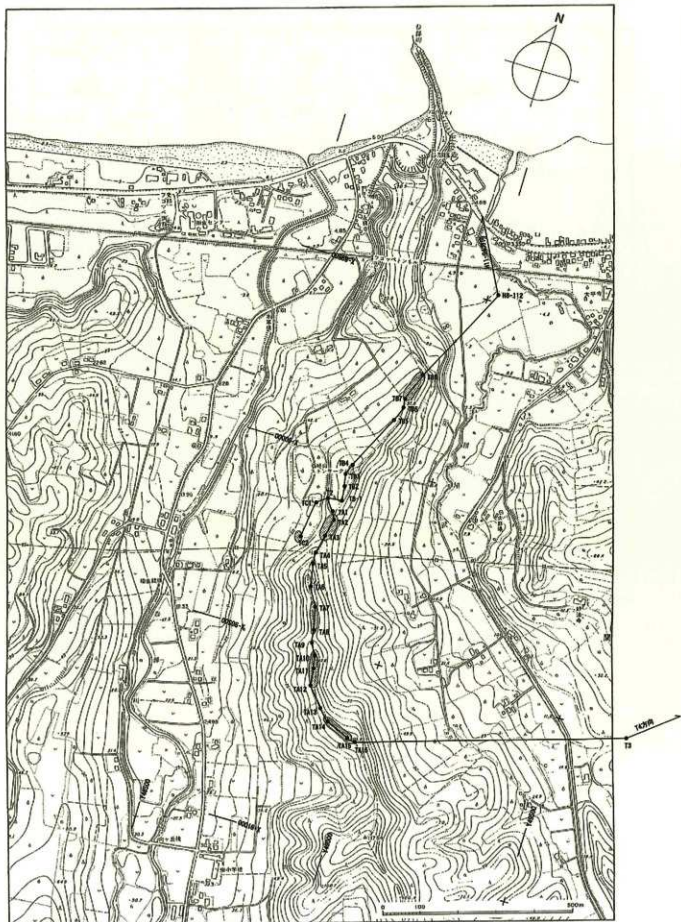
北海道大学の調査区と思われる位置に礫が露出しており、10cm程掘り下げたところ、調査杭として利用した釘が残存していたため、当時の調査区を確認することができた。また、報告(大場・重松1977)の中で、地形図に石組みが数ヶ所記載されており、それに相当する場所付近を精査したところ、未調査の配石を数ヶ所確認した。配石は比較的大型の礫が円形に配置されるものと扁平の川原石が並べられるものと大きく2種類が見られた。これら北海道大学の調査区と未調査の配石遺構を実測し、4区全体の地形測量を行っている。

5区：平成9年に行われた北海道教育委員会と小樽市・余市町の分布調査で尾根筋に沿って礫群が確認された地区である。北側から5区a、5区b、5区cの3地区に分かれる。現況は高さ1m以上の笹が密生していた。笹刈り終了後、各調査区に4級基準点を設置し、調査区を見通せる位置に調査基準点を設けた。

礫群が縄文時代の所産であるかどうかを確認するため、礫が集中する部分にいくつかトレンチを入れ、礫が置かれている状況を調査した。その結果、5区で確認できる礫はすべて表土上ないし表土中に置かれたものであった。しかし、縄文時代に配石として用いられた礫を後世に集石した可能性も、完全には否定できないため、礫が集中している周りや礫が見られない部分にもいくつかトレンチを設定し、礫の抜き跡や土壌などの遺物の検出に努めたが、確認できなかった。

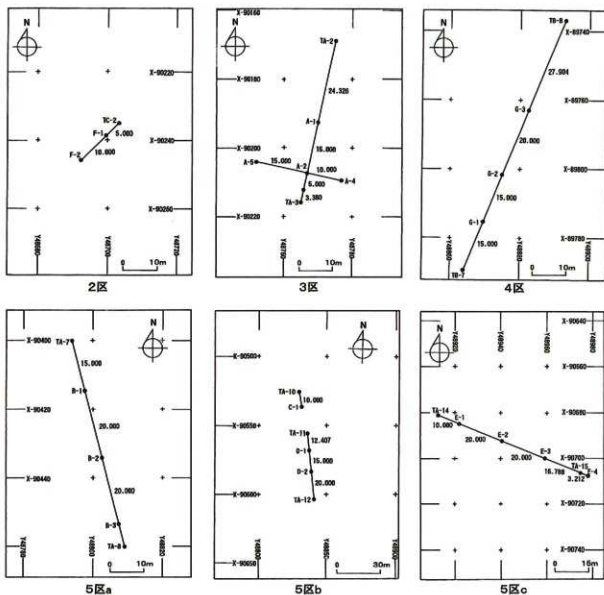
5区の各調査区で、トレンチの位置と地形の測量を行っている。

(村田)



図Ⅲ-1 測量基準点網図

1 発掘区の設定

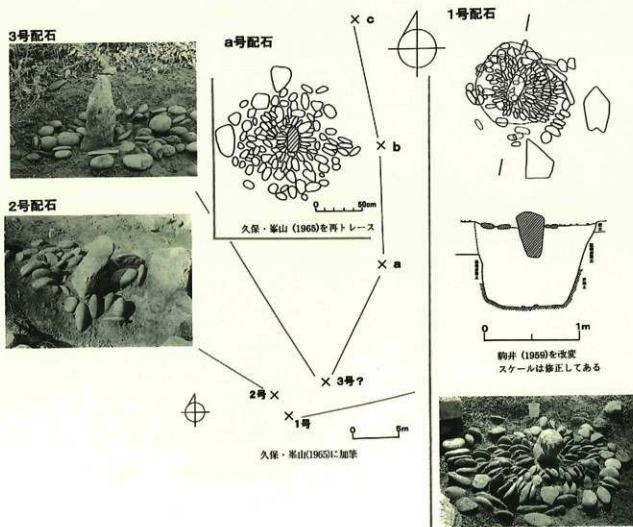


図Ⅲ-2 調査区別測量基準点位置図

IV 2区の調査

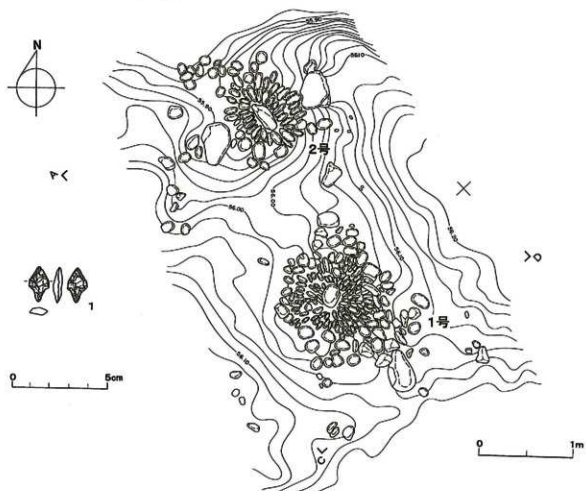
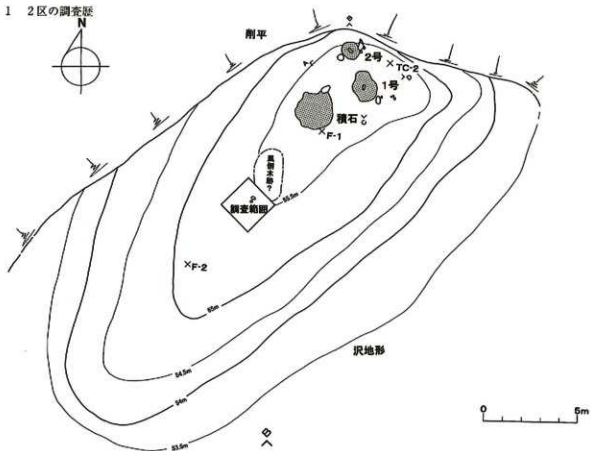
1 2区の調査歴

2区は昭和26年(1951)9月、東京大学教授の駒井和愛により最初の調査が行なわれた。1区から「沢を一つ越えた西方丘上に積石塚、即ちケールンらしいものがあったので、我々はこれをも発掘してみた」(駒井1953)とされる地区で、積石下に3基の配石が確認されている(1・2・3号)。1・2号は接近しているが、3号はその西北西にやや離れてあった。2・3号について配石下部を調査するが、立石を埋没するための穴らしいものはあっても、墓壙と思えるものは見出されなかった。翌27年10月、1号配石下部を調査し、土壌を確認しているが、遺物は検出されていない。1～3号の写真と1号の実測図が残されている(図IV-1)。これらの配石は調査後復元されたようである。なお駒



図IV-1 2区の調査歴

1 2区の調査図



図IV-2 2区の配石遺構実測図と遺物

井は2・3区のような、中央に立石をもつ配石を「立石遺構」と呼称している。

昭和34年以降、西崎山ストーンサークルは久保武夫を顧問とする余市高校郷土研究部によって、年に1回はパトロールと除草、整備などが行なわれていたが、昭和38年5月、部員により3号配石の消失が確認される。同時期に3区の一部の破壊も確認されており、「心なき観覧者や閑壁のため」(峯山・久保1965)の破壊であったとある。余市町教育委員会は現況調査を行ない、7月に久保武夫、峯山巖らにより2・3区の復元と整備が行なわれた。2区1・2号配石上には石塊が山積みになっていたが、組石構造の破壊は少なかったようである。配石の復元は、駒井の報告と久保が以前に撮影した写真、さらに昭和25年から27年の駒井による発掘に参加して、発掘後の復元にも携わった中村子之吉の助言協力を受け、1・2号について進められた。

復元終了後、2区北側、丘の稜線に沿って石積み3カ所を確認し(a・b・c)、翌39年4月に分布状態の実測、配石の確認が行なわれる。b・cは明確な配石はなく、「配石の疑い」とされたが、aについては配石が確認された。発掘はせずに平面実測を行なっている(図IV-1)。a号配石と駒井が2区3号とした配石は、写真をみるかぎり立石が同じである(図IV-1写真と図版6-2・3)。

昭和40年には2・3区の復元経過と、整備状況をまとめた『西崎山』(峯山・久保1965)が刊行された。2区の配石を「特殊組石」と呼称して、「中央に立石をおき、それを囲んで石を組み合わせたもの(中略)いわゆる日時計式と呼ばれている大湯A型式に近い形態のものである」と報告している。また1・2・3号とa・b・cの配石位置図(図IV-1)が掲載されているが、3号は西北西にあったと駒井がしているのに対して、1・2号の北東に「3号?」として記載されている。駒井が3号とした配石はこの時点で明確でなくなっているようである。

昭和59~61年、広域農道建設に伴い、北海道教育委員会により範囲確認調査が行なわれるとともに、一般分布調査が実施され、2区の状況が確認されている。昭和63年、(財)北海道埋蔵文化財センターが隣接する栄町5遺跡を調査し、その際に1・2号配石を再確認して、写真を撮影した。この清掃中に石鏝を採取している(図IV-2-1)。a・b・cの配石についてはみつめることができなかった。

2 2区の調査

2区は、1区と3区のある西崎山尾根部から沢地形を挟んで西側の丘上に位置する。標高は53~55mである。配石のある丘陵は昭和34年当時の写真では北西側はなだらかな斜面となっていた(カラー図版3-2)が、現在は北から西側が重機で削平され、あたかも独立丘状の様相を呈している。

笹刈りと落ち葉除去後に地形測量を行ない、配石の現況の写真実測を行なった。1・2号配石は復元された状態で良好に残っており、すぐ南には復元時に配石上部に積みまっていたと思われる亜角礫が積み上げられていた。峯山・久保(1965)で3号配石があったとされる場所は削られて存在しない。また道埋文(1990)の写真と比較すると2号配石側がさらに削られたようである。

1・2号配石は大型の礫を中央に配し、その周囲に扁平な円礫を立てて、放射状に並べている。1号は4重になるが一番外側は石が立っておらず、平置きされた状態のものが多い。2号は1号より若干大きめの石を2重に組んでいる。大型の亜角礫がその外側に2個対になるように配置されている。現況では倒れているが、整備時の写真をみると、立っていたようである。

配石から3m程南西に礫が2つみられたため、周囲2×2mの範囲で3cm程掘り下げたが、遺物、遺構とも検出されなかった。また周囲の尾根上に他の配石遺構がないか確認を行なったが検出できなかった。

3 2区の遺物

なお2区と3区の間にあたる3区の斜面下に大型円礫が散在していた。これが積石 a・b・c に対応する可能性がある。

3 2区の遺物

遺物は今回の調査では出土しなかった。昭和63年の清掃時に採取された石鏃（1）を掲載した。有茎で小型。表裏に剥離面を残す。黒曜石製で流紋岩の球果が混じっていない。

（愛場）

V 3区の調査

1 3区の調査歴

昭和27(1952)年、駒井が2区1号配石調査後に「その前から西崎山の南方の林の中にも立石遺構らしいものが存することを知っていたので、この機会に雑木を切り倒し、雑草を刈り取って調査する」(駒井 1952.b)とした部分が3区と推定される。他に「西崎山の南の丘」(駒井 1953)、「西崎山表」(駒井 1959)と表現されている。3基の配石を確認し(1・2・3号)、1・2号を発掘している。2号の下には16cm程の穴があったとされる。1号については割石、2・3号については河原石で構成されていた。また3号の積石や周囲の礫に簡単な線刻のあったことが指摘されている。3号については昭和28年に調査する予定とされたが、報告はない。

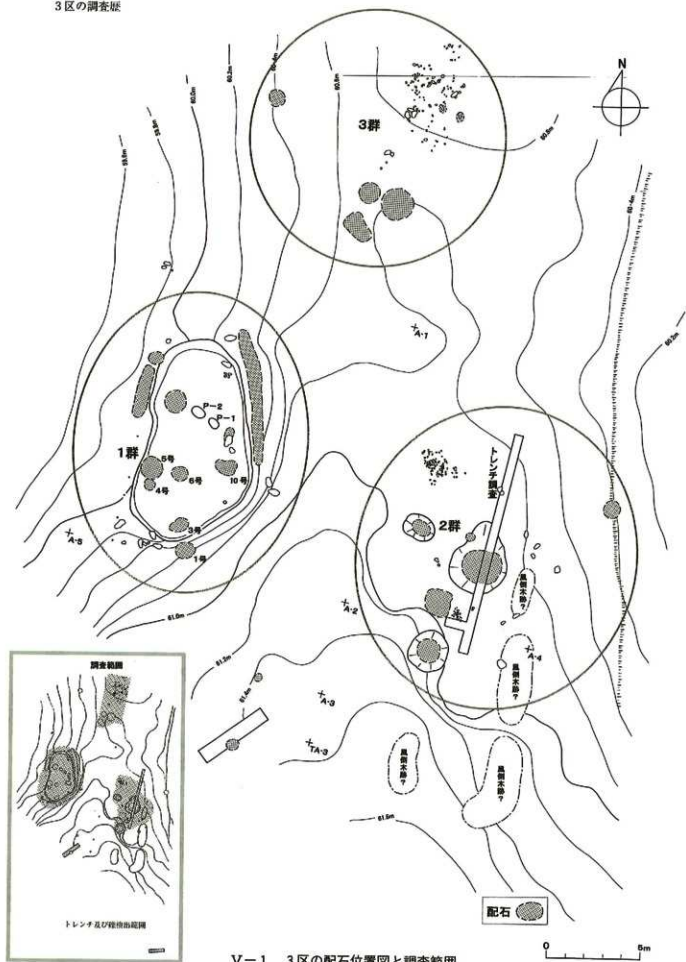
昭和38年5月に3区が一部破壊されていることが余市町教育委員会によって確認された。ついで7月、峯山を中心に現状の平面実測、浮石除去後の平面実測、斜面部の測量とP-1~3の発掘が行なわれている。しかし「遺構にも実測図が手に入らなかった」ため、復元ではなく、現況のままを記録整備したようである。P-1・2からの出土遺物はなく、P-3は寝石の抜き跡であった。整備に際し立石に「No.」を、組石に「号」で番号をつけ、配石を特殊組石(3・4・6・10号・No.7)、サークル状に並列する立石(No3・6・8~10)、寝石のみの組石(2・5・11号)に3分類している。特殊組石は中央に立石をもつ2区と同様のもので、寝石のみの組石は、円形に集石されたものである。これら配石番号は駒井の1・2・3号には対応していないようである。なお整備後に仮柵を設け、保存を図っている。(峯山・久保 1965)

昭和43年刊行の「仁木町史」で、久保は「立石を主とする遺構は西崎山の西に3つあり、そのうちの2つは美しく整っている事では秋田のストーンサークルに劣らない。最近また近くの草むらの中から6・7ヶ所発見されたので北大名取武光氏を中心に余市高校郷土研究部員等参加し調査をすゝめている。また西崎山の北につらなる丘陵の尾根ぞいの耕地のすみには、相当数これと同形式のストーンサークルが破壊されているのが残存している。」と書いている。「西崎山の西」が2区とすれば、「近くの草むら」は3区の未調査部分を指している可能性がある。

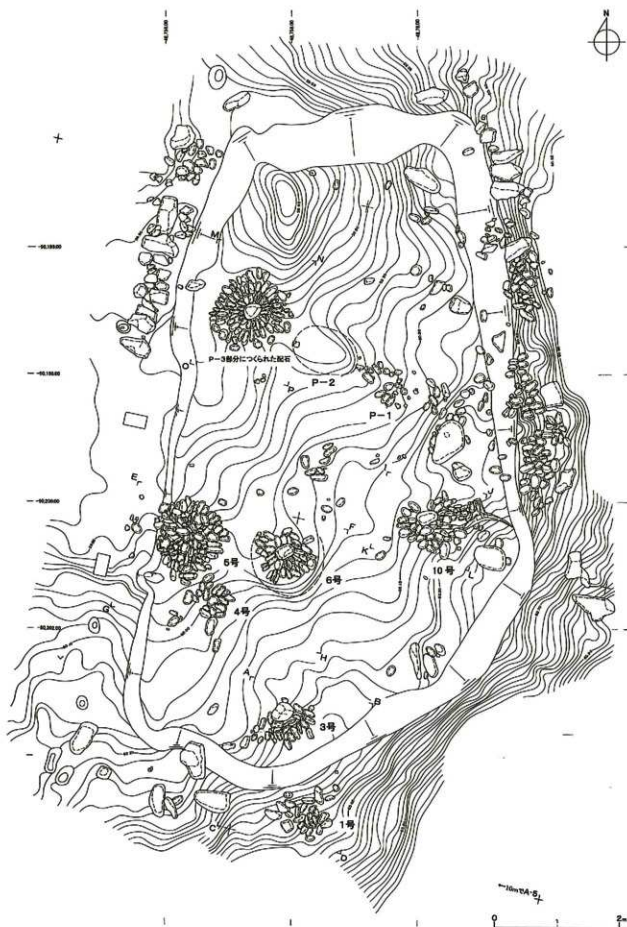
昭和54年、大和田哲氏が顧問をしていた忍路中学校忍路理科クラブが、3区2群(後述)の「Cn墳墓」、「A墳墓」配石下をボーリング調査し、土壌を分析している。遺体が埋葬されている部分は、周りの土壌と違う特性になるという予想のもと、窒素定量分析・PH測定、電気抵抗などを測定したもので、墓塚の可能性を指摘している。調査は北海道教育委員会の指導により、西崎山ストーンサークルの2号墳が適当とされたが、すでに調査がなされているようなので「土地の古老により2号墳墓近く、小樽地区に一部盗掘されている墳墓があると聞かされ、(中略)2号墳近くを3日間捜し求めた結果、新しい墳墓群を発見できた。」というものであった。ここでいう2号墳は図面から3区1群の配石のひとつであるらしい。2群配石の位置図(図V-2)と写真がある。(忍路理科クラブ 1979)

昭和63年、(財)北海道埋蔵文化財センターが栄町5遺跡を調査した際に、3区(1・2群)の現況写真撮影を行なっている。報告書で3区の配石群を1~3群にわけている。それによると1群は昭和38年に峯山らによって整備された部分で、ほぼ整備時の状況を保っていた。2群は昭和38年に移動していたものを集石したもの。3群は最も北側にあるいくつかの集石で、後世に石組らしくしたものらしく、農地造成時には存在していなかったとしている。

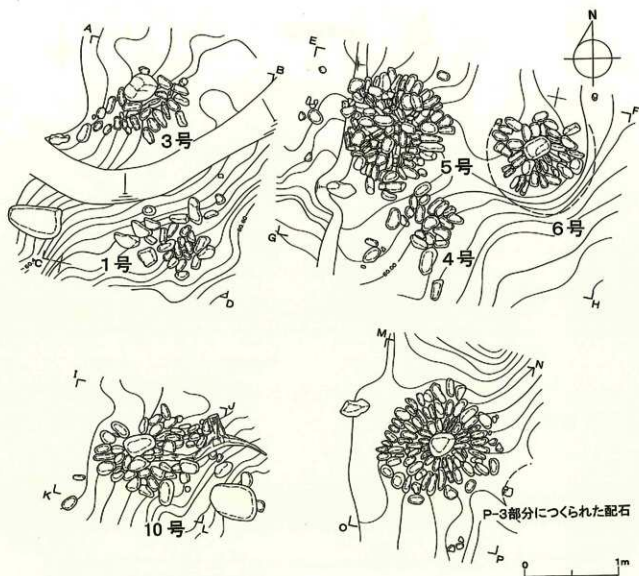
3区の調査図



2 3区の調査



図V-3 3区1群の配石遺構実測図



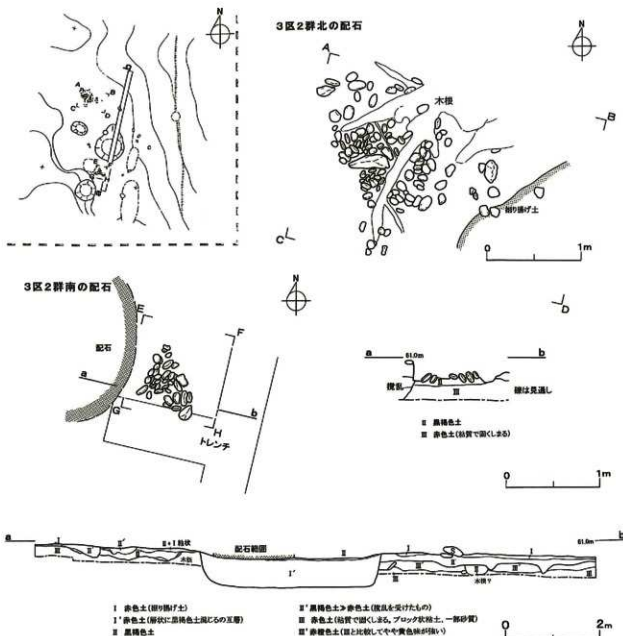
図V-4 3区1群の主な配石遺構

1群は3区余市側（西側）の緩斜面部を切って、平坦部を作り出した部分で、昭和27年に胸井によって発掘され、昭和38年に峯山らによって、一部の調査と整備が行なわれた地点である。斜面を切って平坦にした部分に、いわゆる日時計型の配石が4ヶ所みられる。多くは扁平な円礫が利用されている。整地部周囲には比較的大型の亜角礫が並んでいる。

2群は3区の小樽側（東側）に位置する。扁平な円礫が5ヶ所に円形にまとめて置かれている。内3ヶ所は窪みに配石される。石はいずれも浮いた状態で、周囲には掘り上げ土がみられる。

3群は3区の北寄り位置し、組石1ヶ所と扁平な円礫や亜角礫の集中がみられる。腐植しきらない落ち葉の上にあるものがほとんどである。

2 3区の調査



図V-5 3区2群の調査状況

(2) 1群の調査

1群は窪み部分を清掃し、写真実測および地形測量を行なった。

配石は落ち葉を除去するだけで容易に露出した。峯山・久保の実測図と基本的には大きくかわらず、礫の増減はあるが1・3・4・5・7・10号配石について確認できた。P-1・2についても落ち込みにより、位置が確認できた。しかし石の抜き跡とされたP-3部分には、日時計型の配石が新たに設けられていた。これは久保武夫資料の昭和39年春と思われる写真(図版10-2)にすでにみられるため、整備後につくられた可能性がある。

6・10号とP-3部分の配石は、中央に立石があり、周囲に放射状に扁平円礫が配置されるタイプのものである。しかし多くは立石周囲の礫が浮いており、現況の残りは良くない。3号については割

り石を利用しており、駒井の1号に対応するようである。

1群西側で昭和38年整備時の仮橋の杭跡を数箇所確認し、2ヶ所について半割した。杭は掘り上げ土上から打たれている。現況では不整形の竪穴状の窪み中に配石しているようにみえるが、これは発掘や整備などで排土を周囲に捨てたためで、本来の姿ではない可能性がある。

駒井が指摘した(1952.b)礫の刻線については今回確認していない。

(3) 2群の調査

落ち葉除去後に礫群周辺を清掃し、地形測量を行なった。落ち葉を取り除くと扁平円礫を円形にまとめた礫群が5カ所認められた。うち3カ所は窪みに礫がまとめられている状況であった。周囲には赤色土の掘り上げ土が広い範囲でみられ、礫群はいずれも浮いていた。これらの礫群は『餅屋沢墳墓群について』(忍路理科クラブ 1979)で、2ヶ所についてCn墳墓、A墳墓と名称が与えられている(図V-2)。礫群がどのような性格のものか調査するために、Cn墳墓とされた礫群と掘り上げ土の広がりについて50cm幅のトレンチをいれた。トレンチにかかる礫については実測を行ない、写真を撮影した後、移動しておき、調査後復元した。

トレンチ調査により、配石下に直径約4m、深さ約60cmの掘り込みと、それを埋め戻した跡が確認され、すでに調査が行なわれていることが明らかになった。掘り込み内の土は地山由来の赤色土で、やわらかく、一部には炭もみられ、調査時の埋め戻しと思われる。この礫群は配石遺構下を発掘後、埋め戻し、その上に円形に戻したもので、埋め戻し土が沈下して、窪みに配石されたような状況になったのであろう。他の2カ所の窪みに礫群があるものと、それ以外についても、集石状況が同じため、すでに調査が行なわれている可能性が高い。昭和54年の忍路中学校の調査はボーリング調査であり、記録された配置図や写真と現況が変わらないため、それ以前に調査が行なわれたようである。周辺を精査した結果、配石遺構とみなせるものが2カ所確認された。ここでは2群北側・南側の配石と表現する。

2群北の配石

2群礫群北側の木の根元付近に扁平円礫がまとまっていたため周囲を掘り下げたところ、遺構と考えられる配石を検出した。立石と思われる亜角礫があり、その北側周囲に扁平円礫が放射状に配置される。南側には配石はみられない。円礫の多くは浮いているが、中心の立石に近い礫は側面をみせ、立った状態で埋まっていた。土層の確認は行なわなかったため、この配石の性格は明確ではない。

2群南の配石

トレンチの南西部にある礫群へ向けてトレンチを延長したところ、その礫群近くの地表下約15cmの辺りで扁平円礫が20個程立った状態で確認された。石は整然と並べられており、配石遺構の一部が未破壊で残ったものと考えられる。これに類似した配石が黒川砂丘遺跡調査で撮影されているので、参考で掲載した(図版13-1・2 久保資料)。

今回のトレンチ調査から、次のことが指摘できる。

1. 現在みられる礫群は、配石調査後に、埋め戻した土の上に置いたものであること
2. 南の配石の残存状況からみて、遺構全体の調査を行なったのではなく、一部が残されていること
3. 北の配石のように周辺に未調査の配石が残存する可能性があること

2 3区の調査

(4) 3群の調査

3群については落ち葉除去後、礫のひろがる範囲をおさえ、地形測量を行なった。亜角礫は集積され、円礫は散在する傾向がある。1ヶ所立石のある配石があった。礫はすべて腐植しきらない落ち葉の上であり、近年移動された礫の可能性が高い。

3区では南側斜面にいくつかの礫群が確認されている。このうち3ヶ所について(図V-1)トレンチ調査を行なった。いずれも礫は表土層にあるものであった。石質は3区の配石群のものとは異なり、地山の礫と考えられる。(愛場)

IV 4区の調査

1 4区の調査歴

西崎山ストーンサークルの4区は、昭和43・47年（1968・1972）の两年に北海道大学の大場利夫、重松和夫が中心となり発掘調査が行われ、昭和52年（1977）に報告されている。5基（第1～5号）の組石遺構が調査された。報告の概略を記す。

第1号：約30個の石からなり、範囲が250×220cmほどである。石を除くと浅い皿状になる。墓横らしい掘込みは確認できなかった。

第2号：第1・3号と接している。約60個の石からなり、180×180cmの範囲に広がる。中心部に小さな石が2重・3重に詰め込まれ、周辺の石は中心に向かって傾斜している。石の下は浅い皿状の土壌となる。墓横等の確認は調査条件の制約から行われていない。石鏃が1点出土している（図VI-1）。

第3号：第2号に類似した形態をもつ。150×200cmの範囲に約120個の石で作られていた。周辺部は約20個ほどの大きな石を並べ、内側は2重・3重に小さな石が並べられている。第2号と異なる点は、石の下の浅い皿状になった土壌底部にも、大きな石がきれいに敷き詰められていることである。4個体の小型の土器が出土している。いずれも縄文時代後期中葉のもので、底部などが打ち欠かれている。石の下は調査せず保存している。

第4号：約20個の石で構成されており、石の範囲は60×80cm。すり鉢状の土壌に川原石を縦位か斜位に詰め込んだ形態を持つ。隣接する第5号と分離できるか否かの判断はついていない。縄文時代後期中葉の小型鉢形土器が1個体出土している。

第5号：中央に長さ約70cm、径約25cmの立石を持つ。立石の周囲に大小約60個の石が、120×100cmの範囲で組まれている。石の下に深さ約90cmの土壌がある。石鏃が1点出土している。

報告ではこれらの遺構を2種類に分類している。

- 1 組石下に浅い皿状の土壌を伴うもの（第1～3号）
- 2 第1～3号よりは深い土壌を伴い、その中に立石を中心に石を縦または斜めにしつめ込んだものである（第4・5号）。

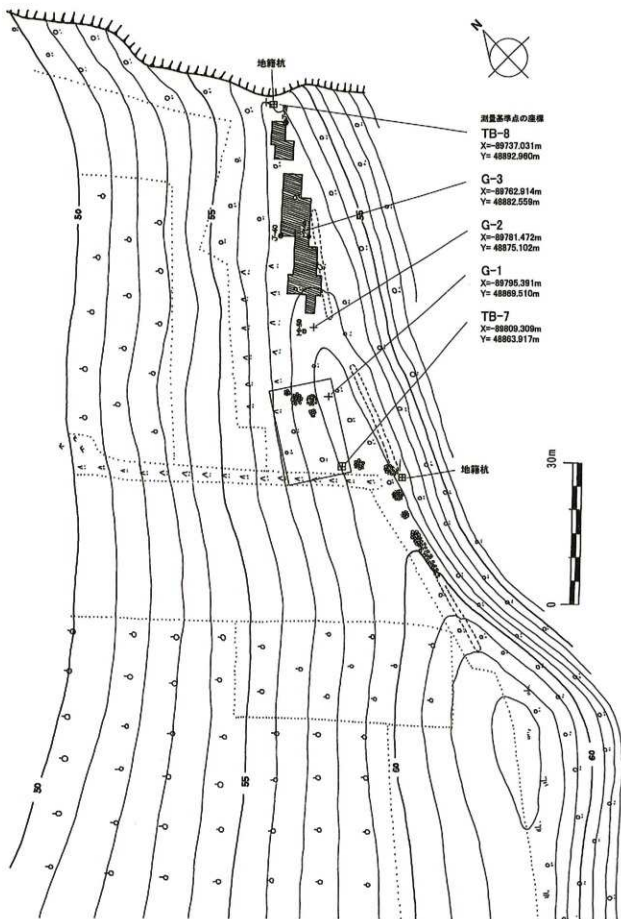
いずれも墓の可能性を想定しているものの確定するにいたっていない。

2 4区の調査

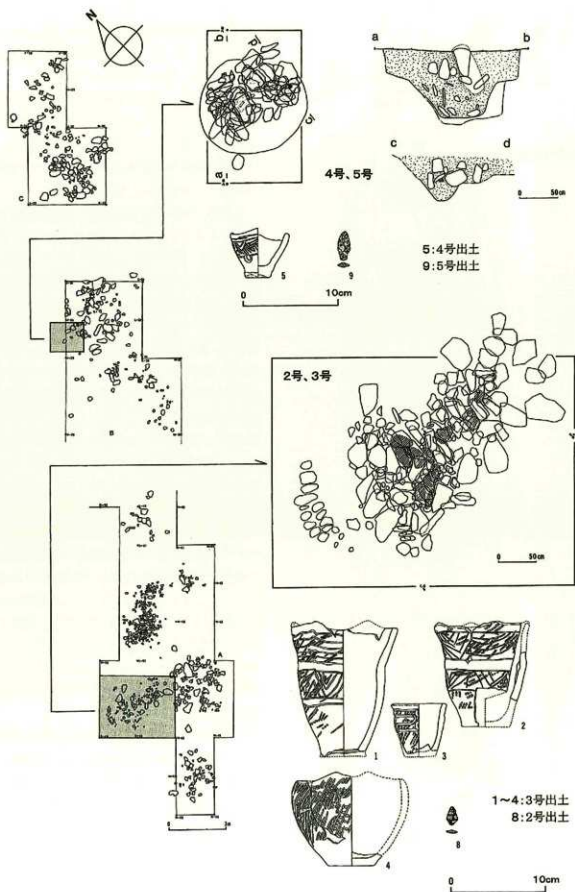
4区は道指定の1区から北へ250mほど行った、丘陵の屈曲部に位置する。余市側は比較的緩やかな斜面でさくらんぼ等の果樹園として利用されている。小樽側の傾斜は急で、北側は崖になっている。標高は約53m～57mである。調査範囲の現況は雑木林となっており、調査前は高さ1mほどの雑草が繁茂していた。

調査は北海道大学の調査範囲を確認することを目的としてはじめた。下草を刈り、落ち葉を除去した段階で、調査区の北側で礫が露出しているのが確認できた（図版14-2）。このため表土を約10cmほど掘り下げたところ、当時の調査で調査杭として利用した釘が残存していたため、当時の調査区を復元することができた。

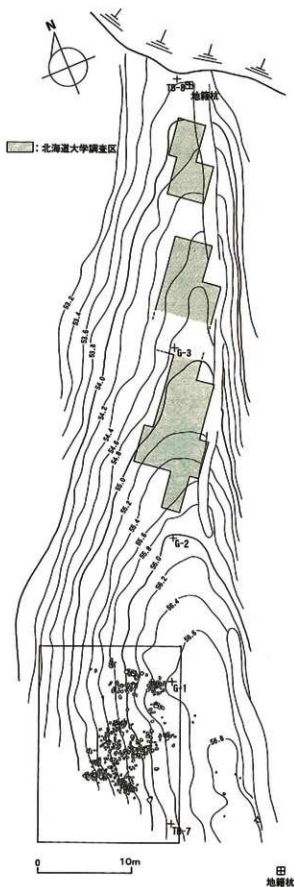
遺跡の現況を、報告の平面図（図VI-2）と比較したところ、調査区北側のH-29・30、I-29～32、J-31・32区はほぼ当時の状況を維持しており、礫の下は未調査であることがわかった（図版15



図VI-1 北海道大学調査の位置 (大場・重松 1977に加筆)



図Ⅵ-2 北海道大学調査実測図（大場・重松 1977に加筆）



図VI-3 4区の地形

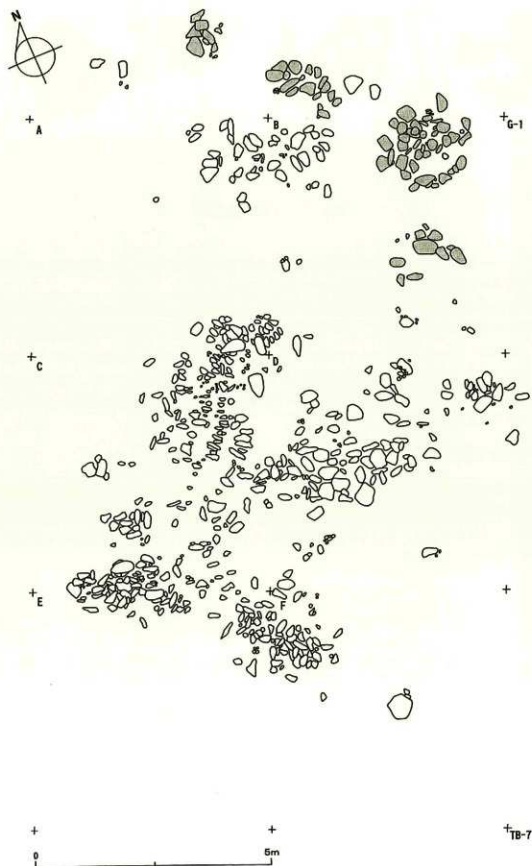
－1)。その他は礫が調査区内にまとめられていたが、J-35・36、K-35・36区は礫が抜き取られ、ほとんどみられなかった。

報告の中で、全体の地形図に石組が数ヶ所記載されており（図VI-1）、それに相当する付近を精査したところ、4ヶ所の石組を、ほぼ図の位置で確認することができた（図VI-4でトーンを貼った部分）。

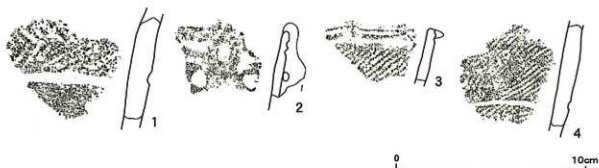
この際、南側の未調査地区に大型の礫がまともって露出しているのがみられたため（図版16-1）、表土層を若干掘り下げて、礫の配列を確認した。その結果、いくつかの小規模なまとまりが認められ、配石遺構と判断した。図VI-4に示したが、今回の調査はその性格上、礫の配列を確認したのみで、土層の状況等を観察することができず、その内容の詳細は不明である。そのため、今回新たに確認された配石遺構については、特に遺構番号等を付していない。ここでは、便宜的に4区に設定した調査基準点のG-1とTB-7を結ぶ線の西側を5mのメッシュに分け、それぞれA地区～F地区と呼んで説明する。

南側の未調査地区で確認された配石遺構は、大きく2種類のものがみられる。北海道大学の調査で確認されたものと今回調査のD地区でみられるものは、人頭大以上の比較的大きな礫が円形にまとまるものが多く、倒れてはいるが立石を伴うと思われるものがいくつかみられた。また、中心部がくぼんでいるものがあり、配石の下に土壌等が存在する可能性がある。

C地区でみられるものは、棒状の礫を2列もしくは3列に並べるものである。北海道大学の調査で、K-45区の第3号付近の石組と類似する礫の配列である。今回の調査では、10cmほどしか掘り下げていないが、確認できた礫の下にも多数の礫がみられることから、何層かにわたって石が組まれている可能性がある。



図VI-4 配石遺構実測図



図VI-5 4区の出土遺物

E地区でみられるものは、配列に規則性がなく、腐植土の上におかれているものが多いことから、後世の耕作等による除礫が集石されたものと考えられる。

全体の状況は1区に類似する。配石に用いられている礫は地山に含まれている安山岩の亜角礫が多いが、扁平な川原石も多数みられ、これらは明らかに搬入されたものである。今回調査はできなかったが、丘陵頂部にも大型の礫がいくつか露出しており、これらも一連の配石遺構である可能性が高い。また、北海道大学の報告では今回の調査範囲外に石組みが数ヶ所記録されており、1区から4区にかけての丘陵上に、配石遺構が連続して存在する可能性が高いと思われ、遺跡の範囲は1区から4区の丘陵上すべてに及ぶと考えられる。

3 4 区の遺物

4区から出土した遺物は、合計255点で、ほとんどが黒曜石の剥片である。1は縄文時代後期の土器片で、この時期のものは1点のみである。磨消縄文と沈線がみられる。今回新たに確認された南側の調査区からの出土である。2～4は縄文時代晩期の土器片である。すべて北海道大学の調査区からのもので、22点出土している。

(村田)

Ⅶ 5区の調査

西崎山ストーンサークルが、南側の尾根上にどの程度の範囲で広がっているかについて、戦後の一連の調査では、明確にされなかった。また、昭和50年代以降の調査においては、藪が深くなり、笹竹が生育して奥まで立ち入りにくいこともあって、3区から奥についてはほとんど調査されなかったと言ってよい。平成9年11月に、ようやく北海道教育委員会と小樽市・余市町の協力で、この地区の調査が行われた。草刈と落ち葉除去を行なって礫群を確認する作業を行なった結果、尾根筋に沿って、点々と礫群が確認できた。余市側から5区a・b・c（田才ほか1999）、小樽側からH区3・4・5（小樽市教育委員会 1999）としたものである。今回は、余市側の名称を使用した。

Ⅲ章の調査の方法で述べたように、草刈と落ち葉除去を行なった後、各区ごとに基準線を設置し、一定距離で杭打ちを行なって、基準点を置いた。後に座標点を計測している。礫群が集中している部分にトレンチを入れ（A～V）、礫がどのような状況で置かれているかを確認した。また、数箇所で礫を採取し、地山の礫との比較を試みた。

なお、草刈と落ち葉除去を行なった段階で、礫群の分布は予想以上に広く、並び方に次のような特徴があることが確認できた。

- ① 小樽市と余市町の地境になっている尾根筋に、全体としてほぼ列状にまとまる。
- ② 尾根上の大きな石や木の株の周辺にまとまる。
- ③ 丸く積石状になる。
- ④ 尾根筋から斜面にかかる肩部に、等高線に沿って並ぶ。
- ⑤ 斜面に乱雑に散らばる。

1 5区aの調査（図Ⅶ-1、図版18）

標高88mから91mほどの、比較的中の広い尾根筋に礫が集中している。基準杭〔B-1～3〕を設定し、A～F及びVトレンチを尾根筋に直行する位置に設定した。トレンチCとEは②の、Fは③の石積みの断面を見ることを目的とした。

土層は、表土から5～10cmほどは根が入り、その下に黒色土層（Ⅰ層）がほとんどなく、褐色土（Ⅳ層）になっている。Ⅳ層に礫が多量に含まれる部分と、ほとんど入らない部分がある。C・Eにみられた巨大な礫は、Ⅳ層から顔を出しているもので、人為的に設置したものとは考えられない。その周辺に積まれた礫は、いずれも表土の黒色土や根の上に積まれたものであり、あまり年代がたっていないと判断された。EやFにみられた③の石積みについても、いずれも表土の黒色土や根の上に積まれたもので、同様の判断がなされる。

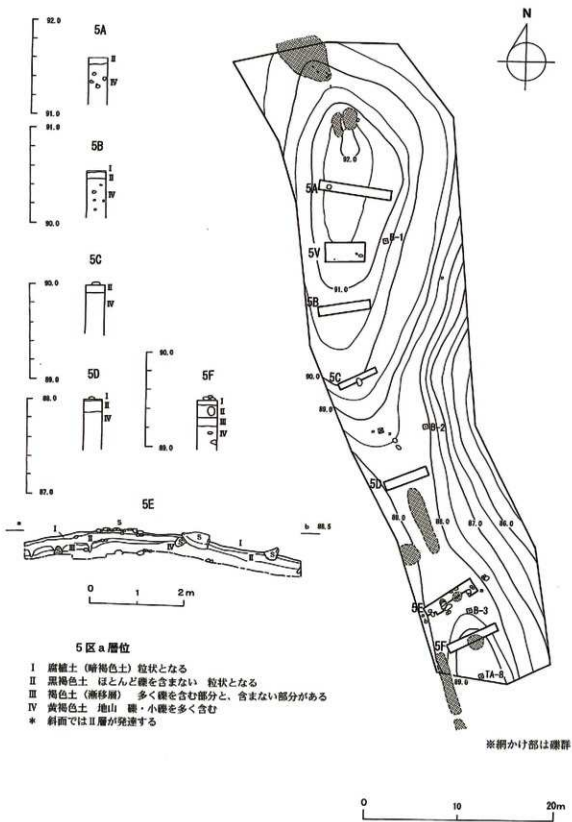
なお、5区bよりに、④の石組がはっきり残っており、土留めと思われる（図版20-4）。トレンチは入れなかったが、この積み方は、aの石積みと明らかに同様である。

Eトレンチの礫群中から砥石とたたき石が各1点、Vトレンチ表土などから黒曜石フレイク3点、表面で円礫1点がみつまっている。

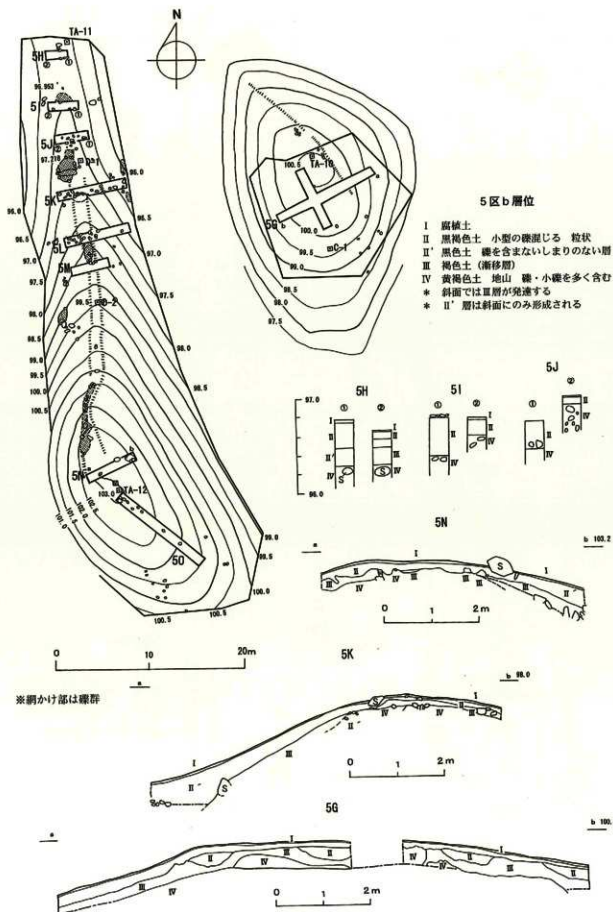
2 5区bの調査（図Ⅶ-2、図版19）

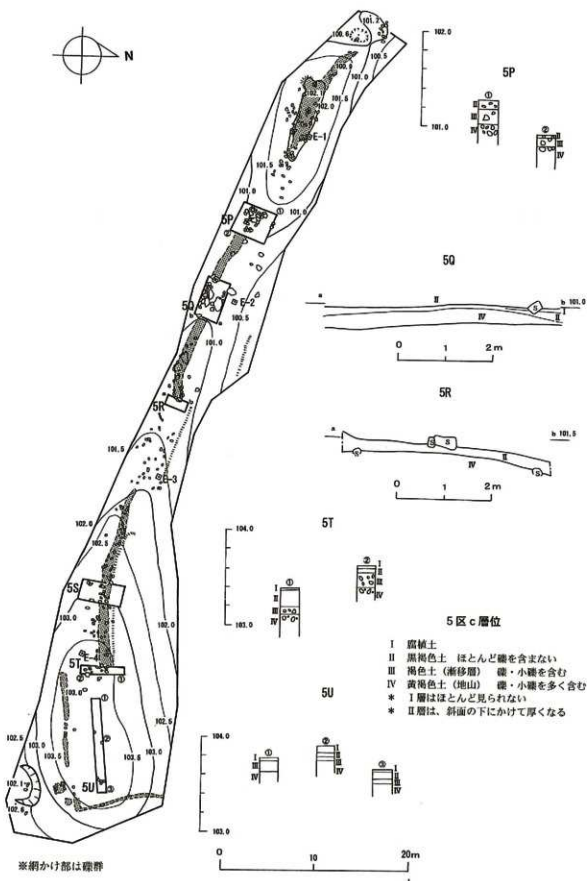
北側のb-1地点と南側のb-2地点にわけらる。

b-1地点は、基準杭〔C-1・2〕を設定し、頂部が平坦になっている標高100メートルほどの尾根上に、十文字にGトレンチを設定した。この周辺は、黒色土（Ⅱ層）がよく残っており、平坦部に礫はみられない。周囲に⑤の状況で散在しているのみであった。この地点では、土壌などの遺構の検出に努めたが、確認できなかった。尾根上部が平坦になっており、肩の部分にわずかながら段が見



図VII-1 5区aの地形とトレンチ





図VI-3 5区cの地形とトレンチ

られることから、畑などとして利用されていたと考えられる。

b-2地点は、標高96mから102mの細い尾根状で、両側は急な斜面となっている。基準杭〔D-1・2〕を設定した。細い尾根の部分が土手状に高まっており、その上に②と列状の④の礫群が見られた。小樽よりの斜面の中ほどに、はっきりとしていないが、斜面に沿って礫群の見られた部分がある。Kトレンチを入れて確認したところ、黒色土（Ⅱ層）が1メートル以上も堆積しており、その中間にも同様の礫群が認められた。黒色土は、しまりがなく、斜面を流れたものであると考えられる。斜面中段の礫群は、急斜面に、表土流失を防ぐ畑の段を形成したものかもしれない。I・K・L・Mトレンチでは③の石積みの断面を確認した。いずれも5区aと同じく、表土の上に置かれたものであることが明確である。

Oトレンチで黒曜石フレイク1点、風倒木の根元から黒曜石フレイク1点が出土している。

3 5区cの調査（図Ⅶ-3、図版20）

今回の調査では、最も南の地区で、標高100～104mほどの狭い尾根筋である。基準杭〔E-1～4〕を設け、尾根筋にトレンチP～Uを設定した。この地区は、細い尾根上に①の礫群が顕著に見られ（図版20-1・2）、所々で、②や③の状況が見受けられた。PとQトレンチは、②の礫群がはっきり確認できたが、調査の結果、巨大な石はⅣ層に含まれているもので、その周辺に積まれた石は、地表面に置かれたものであることが確認できた（図版20-3）。また、最も東の奥の部分では、現在でも地境となっている部分に列状の石組が見られ、尾根に併行していたものが、鈎の手に曲がって、斜面と直行して下る状況が確認された。どの礫群も表土上に置かれたものである。

黒色土は尾根筋で薄く、地山には礫が多く含まれる。尾根筋から斜面の肩の部分に、わずかに段が残っている。そこから下になると黒色土が厚くなり、斜面へと続く。この段や地境に置かれた礫群は、この周辺が畑となった時期の名残であると考えられる。現在は落葉松などの植林が行なわれているが、さほど年月のたったものではないと思われる。

Pトレンチからたたき石と円礫各1点、Qトレンチからたたき石1点が出土している。

4 小括

各地区から縄文時代のものと思われる石器等が出土し、この地区一帯が遺跡であることが確認された。しかし、西崎山ストーンサークルと同じ性格の遺跡ではないことは、これまで述べたように、礫群がいずれも新しいものであることから明確である。

5区の礫群は、巨大な礫が地山から顔を出しているものを除いては、いずれも表土中ないし表土上に置かれたものであった。この地域は、昭和22年の米軍による空中写真で、畑が尾根近くまで広がっていたことが明らかになっている（図版3）。一帯に尾根筋は狭く、5区b-1地点などを除いては表土流失もあり耕作に向いていない。何より官有地（国有地）であったことが開墾を躊躇させ、余市郡と忍路郡の郡境として残されたのであろう。周辺を耕作している時に、地中から出た邪魔な礫を、地境の部分にまとめておいたものが、5区における礫群の実態と考えることができる。5区cにみるような、斜面に直行して下る石組のように、地境（畑境）を明瞭にする意味もあったのであろう。

また、これらの礫群が配石遺構の一部が動かされた可能性についても、石の抜き跡や土壌の存在が確認できず、花岡の肉眼観察では、礫群が地山の石である可能性が強いことから、否定的である。

（越田）

むすびにかえて

今回の調査によって、西崎山ストーンサークル群の範囲が3区付近から丘陵先端部にかけての範囲に、ほぼ限定されることになった。道指定史跡西崎山ストーンサークル(1区)を中心に、2・3・4区に、大小さまざまな配石遺構が存在していることが再確認されたわけである。

これらの配石遺構は様々な形態を呈している。1区と3区1群は、明確に群としてのまとまりをもつものである。3区1群は、半円形の掘り込みが明瞭にわかる。1区についても『西崎山』(峯山・久保 1965)掲載の写真では、中央が若干くぼみ、周囲が盛り上がりが見える。このほか、3区2群、4区北大発掘地区と今回調査した地区では、ある程度群としてのまとまりが認められるようである。2区の1・2号、a・b・cは、はっきりしない。

使われた石材の面では、円礫を主にした2・3区と、安山岩の亜角礫を主にした1・4区とにわけられる。個々の配石の形態では、2・3区では峯山が特殊石組とした日時計型が特徴的である。2区の1・2・3号、a号、3区1群の峯山3・4・6・10号、No.7、P1・3がこれにあたり、3区2群の北の配石もこれに含められよう。2群は石の量が多く、写真で紹介した黒川砂丘上の安芸遺跡や丘陵上の八幡山遺跡の形態に近い可能性がある。1区では、礫で環状に囲い、内側に河原石や割石を敷き、その上に平たい石を置く特徴がある。4区では、扁平な亜角礫を縦に並べるものなどが見られるが、形態が明瞭なものは少ない。

また、配石の下に土壌が伴うものは、2区の第1号、3区1群の胸井第2号、峯山P1・2であり、特殊配石に必ずしも土壌が伴うわけではない。1区の第1から4号にはすべて土壌が伴い、4区3号でも底に石を置いた土壌が検出されている。また、他の配石にも浅いくぼみが見られる。

これらの各配石の時期は、1区4号の敷石の間から縄文時代後期中頃の浅鉢片、4区の3・4号土壌から同時期の小型土器が出土していることから推定されている。しかし、礫の使用法、配石の形態、土壌のあり方などかなりの多様性がみられ、時期差があることを考慮に入れることが必要であろう。

性格について、胸井はリン分が土壌内に多く含まれることから、墓塚の可能性を指摘している(胸井 1959)。また、忍路理科クラブの調査でも墓塚の可能性があるとしているが、今回調査済みの土壌であることが明らかになったので、再検討が必要となった。

現在見られる上部配石については、今回の調査でも手が加えられた可能性のあるものが含まれることが明らかになった。今後、周辺の遺跡と対比させながら、個々の配石遺構の詳細な調査を実施しながら、総合的に研究を進めていく必要があるだろう。

本州北部の秋田県鹿角市大湯環状列石の整備事業が進み、同県伊勢堂岱遺跡、青森市小牧野遺跡、北海道函館市石倉貝塚で環状列石が検出されるなど、環状列石が注目を集めている。西崎山ストーンサークルが位置する余市湾・忍路湾周辺には、これまでに何度も繰り返されてきたように、大小数多くの環状列石の存在が知られている。小樽市では、忍路環状列石と地鎮山の詳細分布調査が進み(小樽市教育委員会 1999・2001)、忍路土場遺跡の調査(道埋文 1988)と合わせて環状列石周辺の様相が明らかになってきている。また余市町では、あらためて八幡山ストーンサークルの確認調査が行なわれ、これまでの調査を含めた環状列石群の見直しが行なわれている。今回の調査がこれらの調査と合わせて、余市湾・忍路湾周辺の環状列石群の保存と活用に向けての一歩になればと思うものである。

なお、道指定史跡「西崎山ストーンサークル」から「西崎山環状列石」への名称変更が、平成13年3月14日に開催された北海道文化財保護審議会から、北海道教育委員会に建議されており、3月末には、北海道教育委員会が正式に決定する運びとなっている。

(越田)

西崎山配石一覧表（調査分のみ）

区	石 組	規 模	配 石 の 特 徴	土 壌	遺 物	備 考
1	全体	11×17m		—		駒井1959
1	第1号	径1m	30cm内外の石塊を並べたサークル内に、小さい河原石を厚さ30cmほどに積み、その上に1つの平たい石をおく。南に立石。	深さ1m	なし	駒井1959
1	第2号	1辺1m	平たい石を横に並べ囲ったサークル内に、割り石を敷き、その上に平たい石を置く。南に立石。西にも立石のあった可能性あり。	深さ70cm	なし	リン分析 駒井1959
1	第3号	径1.5m	立石と寝石を並べたサークル内に、割り石を敷き、その上に平たい石を置く。	深さ1m	なし	リン分析 駒井1959
1	第4号	径1m	3個の立石があり、サークル内に大きな河原石を敷く。	深さ60cm	敷石内に浅鉢片	リン分析 駒井1959
2	第1号	径7・80cm	立石を中心に平たい河原石を縦に並べる。その周囲に寝石。	東西80cm 南北90cm 深さ1m	なし	リン分析 駒井1959
2	第2号		立石を中心に平たい河原石を縦に並べる。その周囲に寝石。両側に小さい立石	なし	なし	駒井1959
2	第3号		立石と根固めの石	なし	なし	駒井1959
3	1群全体	11×7m	半円形の掘り込みあり。内側に配石群あり。	—		
3	(1群) 第1号		立石と割り石を敷き詰める。50cm下に割り石で囲った部分あり。			駒井1962
3	(1群) 第2号		立石を中心に、放射状の縦配列。	深さ16cm		駒井1962
3	(1群) 第3号		立石を中心に、放射状の縦配列。		線を彫刻した河原石	駒井1962
3	(1群) P-1	径50cm	穴の周囲に放射状に河原石を並べる。	深さ35cm	なし	峯山・久保1965
3	(1群) P-2		隅丸方形の土壇	長辺110cm 短辺50cm 深さ30cm	石鐘2、人面状石製品1	峯山・久保1965
3	(1群) P-3	半径50cm	くぼみを中心に半径50cmほどの範囲で、赤褐色土の表面に寝石の凹影と思われる浅いくぼみあり。	径20cm 深さ7cm	なし	峯山・久保1965 表面擾乱
3	(2群) 北の石組		立石の周囲に河原石を放射状に配列。一部のみ残存？	未調査	なし	本報告書
3	(2群) 南の石組		平らな河原石を縦にして、放射状に配列。一部のみ残存？周囲は調査済みか。	不明	なし	本報告書
4	1号	2.5×2.2m	約30の石で構成される。	皿状土壇	土器片1	大場・重松 1977
4	2号	1.8×1.8m	約60の石で構成される。	皿状土壇	石鐘1、土器片10	大場・重松 1977
4	3号	1.5×2.0m	約120の石で構成される。底に敷石。	皿状土壇	小型土器4	大場・重松 1977
4	4号	0.6×0.8m	約20の石で構成される。	浅鉢状土壇		大場・重松 1977
4	5号	1.2×1.0m	約60の石で構成される。中央に立石	1.4×1.2m	石鐘1	大場・重松 1977

引用・参考文献

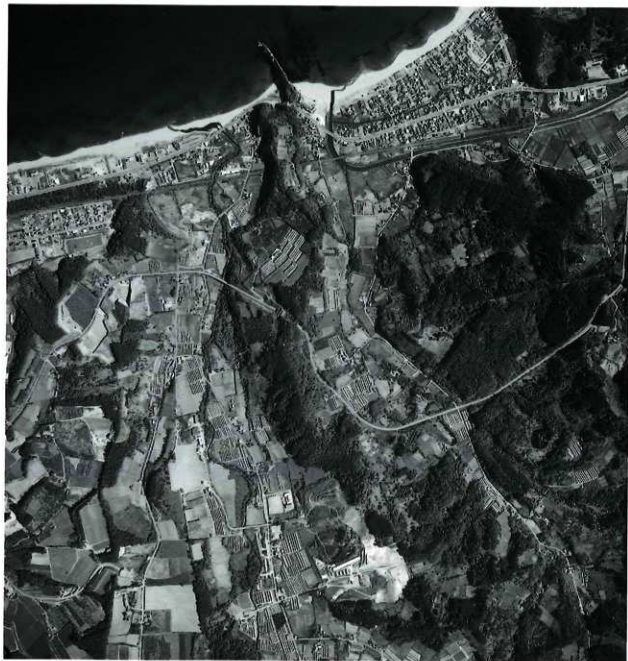
- 阿部義平編 1968「(4) ストンサークル」『仁木町史』仁木町
- 猪木幸男・垣見俊弘 1954「5 万分の 1 地質図幅説明書 小樽西部」及び同証明書 北海道開発庁
宇田川洋校注 1981 「第12章 春部の環状石籬」『河野常吉ノート考古編 1』北海道出版企画センター
- 大場利夫・重松和男 1977「北海道後志支庁余市町西崎山遺跡 4 区調査報告」『北海道考古学』第13輯 北海道考古学会
- 忍路郡考古学研究会 1929「究古」第7輯
- 忍路中学校忍路理科クラブ 1979「餅屋沢墳墓群について」『小樽市青少年科学技術館科学技術賞応募作品資料』小樽市立忍路中学校
- 小樽市教育委員会 1985「忍路11遺跡」
- 小樽市教育委員会 1999「忍路環状列石」
- 小樽市教育委員会 2001「忍路環状列石Ⅱ」
- 加納博・早川寛志・石川俊夫 1987「忍路環状列石の岩石考古学」『郷土と科学』No.98 pp13-22
- 久保武夫 1970「余市町付近のストンサークルの分布」『北海道の文化』18 北海道文化財保護協会
- 河野広道 1958a「先史時代」『小樽市史』
- 河野広道 1958b「小樽・余市附近の重要史跡」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』8
- 駒井和愛 1950「日本に於ける巨石記念物」『考古学雑誌』第36巻第2号
- 駒井和愛 1951「日本に於ける巨石記念物(続)」『考古学雑誌』第37巻第1号
- 駒井和愛 1952a「日本に於ける巨石記念物(続々)」『考古学雑誌』第38巻第1号
- 駒井和愛 1952b「日本に於ける巨石記念物(続々々)」『考古学雑誌』第38巻第5・6号
- 駒井和愛 1953「余市附近のストーンサークル、環状列石墓其他」『余市』余市郷土史研究会
- 駒井和愛 1959『音江』北海道環状列石の研究 慶友社
- 佐藤利雄 1977「余市町登川丘陵より出土の石棒について」『北海道考古学』第13輯 北海道考古学会
- 田才雅彦・青木誠・乾芳宏 1999「西崎山ストーンサークルの調査について」『余市水産博物館報告』第2号
- 長沼孝 1990「Ⅱ-2 西崎山ストーンサークル群」『栄町5遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書66
- 西田彰三 1932「北海道の石器時代」『北海道郷土史研究』
- 登郷土誌作成委員会 1986 「登町の先史時代」『登郷土誌』余市町登町区会
- 北海道埋蔵文化財センター 1988「忍路土場遺跡・忍路5遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告書53
- 北海道埋蔵文化財センター 1990「栄町5遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告書66
- 北海道埋蔵文化財センター 1991「フゴッペ貝塚」北海道埋蔵文化財センター調査報告書 72
- 峰山巖・久保武夫 1965「西崎山」郷土研究No.7 余市町教育委員会・余市町郷土研究会
余市町教育研究所編集委員会 1982 「余市の先史文化」『余市文教発達史』余市郷土史第3巻

写真図版

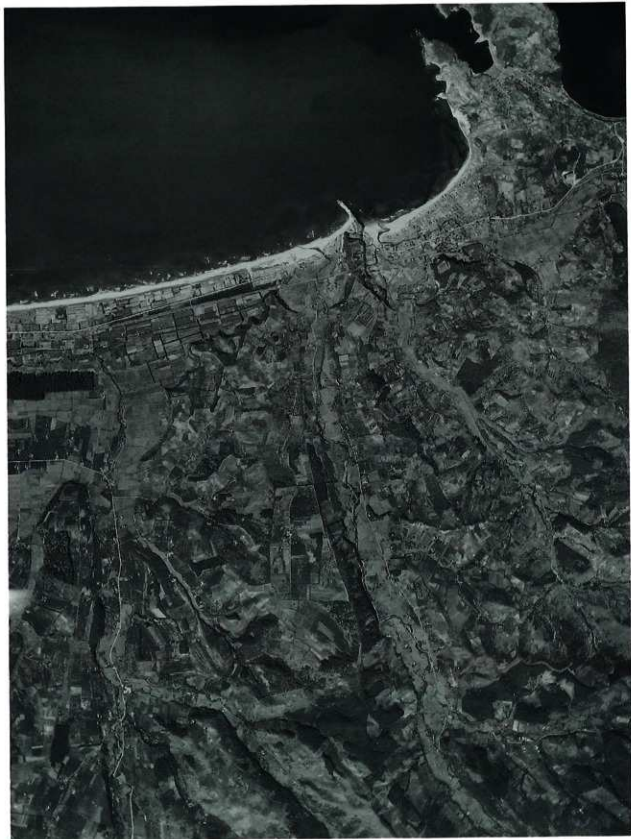


1 遺跡遠景（北から シン技術コンサル提供）

図版2 遺跡の空中写真

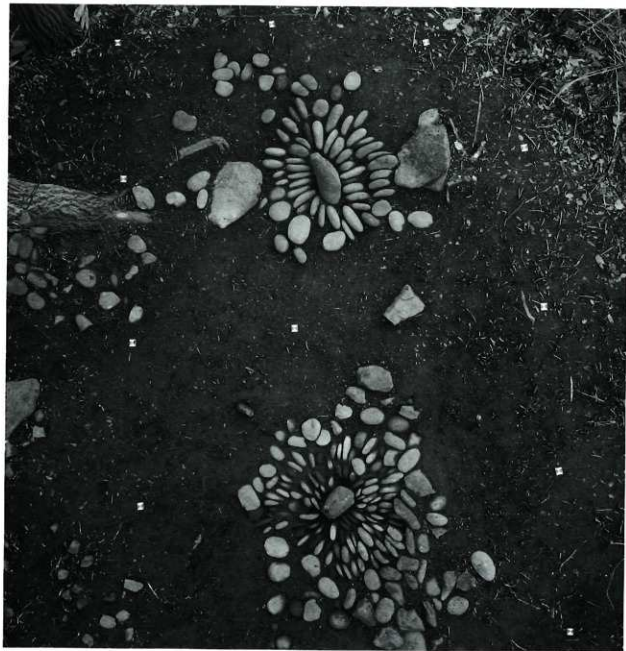


1 遺跡周辺の状況（平成12年撮影 小樽市教育委員会提供）

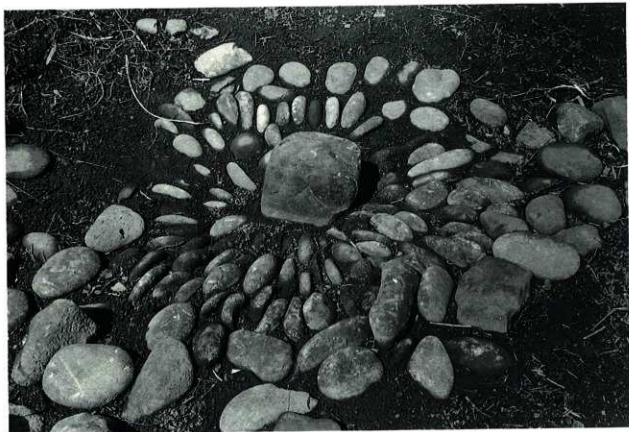


1 遺跡周辺の状況（昭和22年撮影）

図版4 2区の調査



1 2区の配石（上2号、下1号）
（シン技術コンサル提供）



1 昭和38年整備時の2区1号配石（峯山資料）



2 昭和38年整備時の2区2号配石（峯山資料）



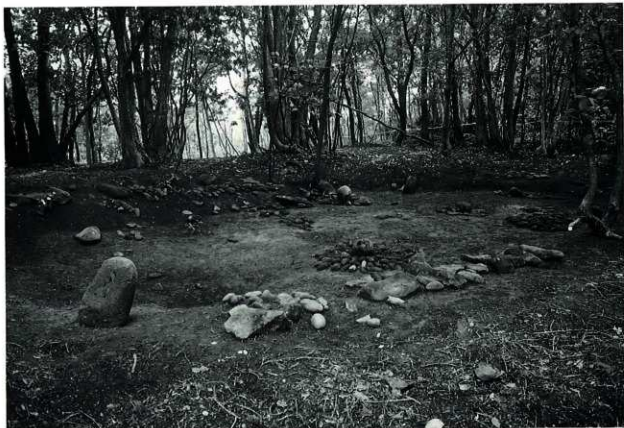
1 昭和39年?の2区の様子 (峯山資料)



2 昭和39年発見の2区a号配石 (峯山資料)



3 久保武夫氏 (左) と峯山麻氏 (右) (峰山資料)



1 3区1群の配石（北西から）



2 3区1群の配石（北から）



1 3区2群の配石（北から）



2 2群配石下のトレンチ調査（南から）



3 2群配石下土層（東から）



4 2群南の配石（南から）



5 2群南の配石セクション（南南西から）



1 3区2群北の配石 (南から)



2 3区3群の配石状況 (南から)



3 3区3群の配石状況 (南から)



4 3区1群調査前の状況 (西から)



5 3区から5区へ (北から)



1 昭和38年整備時の3区1群配石（峯山資料）



2 昭和39年?の3区1群配石（久保資料）



1 昭和38年1群3号配石(峯山資料)



2 昭和38年1群5号配石(峯山資料)



4 昭和38年1群6号配石(峯山資料)



3 昭和38年1群10号配石(峯山資料)



5 昭和38年整備時の3区1群の配石(久保資料)

図版12 3区の調査



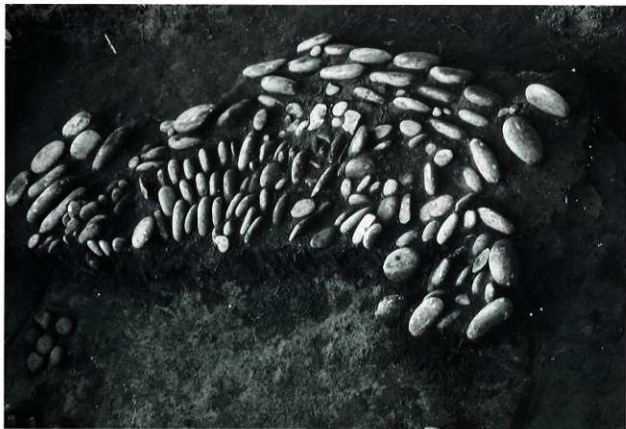
1 昭和54年当時の3区2群配石『餅屋沢墳墓群について』より（小樽市教育委員会提供）



2 昭和54年当時の3区2群Cn墳墓『餅屋沢墳墓群について』より（小樽市教育委員会提供）



1 参考資料 黒川砂丘のストーンサークル (久保資料)



2 参考資料 黒川砂丘のストーンサークル (久保資料)

図版14 4区の調査



1 蘭島地区遠景（4区より）



2 北大調査区現況（北から）



1 北大調査区確認状況（北から）

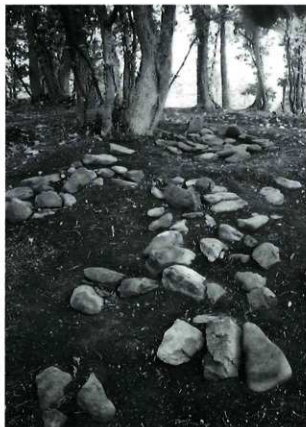


2 北大調査区確認状況（北西から）

図版16 4区の調査



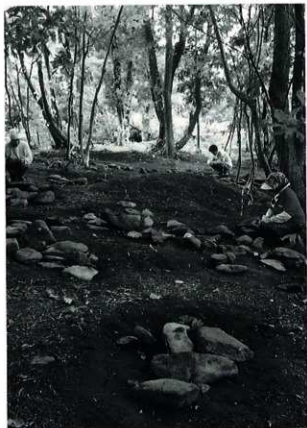
1 南側未調査区現況（南東から）



2 北大調査時に確認された配石遺構（西から）



3 北大調査時に確認された配石遺構（南西から）



1 今回確認された配石遺構（北西から）



2 今回確認された配石遺構（北西から）



3 今回確認された配石遺構（東から）



4 今回確認された配石遺構（南西から）



1 5区aの調査



2 5区a Cトレンチ 礫



3 5区a Fトレンチ 礫群



4 5区aの南側の石組



1 5区bの状況



2 5区b Kトレンチ断面



3 5区b Iトレンチ礫群とホタテ貝の状況



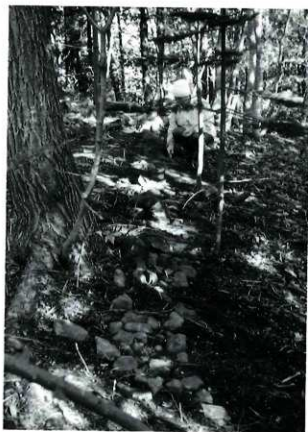
4 5区b Nトレンチ礫



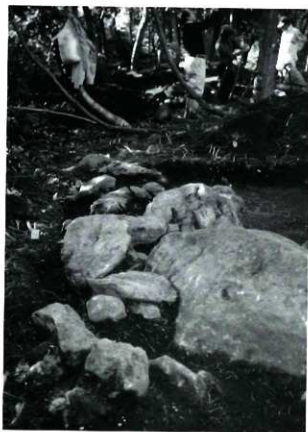
5 5区b Kトレンチ礫群



1 5区c 礫群



2 5区c 石組



3 5区c Qトレンチ



4 5区c Rトレンチ礫

報告書抄録

ふりがな	にしぎきやますとーんさーくる							
書名	西崎山ストーンサークル							
副書名	北海道立埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書							
巻次	第1集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	越田賢一郎・村田 大・愛場和人・花岡正光							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦 2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしぎきやますとー 西崎山ストーン サークル	ほっかいどう 北海道 おたるし 小樽市 らんしま 蘭島 よいちろう 余市町 さかえまち 栄町	01203 (小樽市) 01408 (余市町)	D-01-64 D-19-04	43度 11分 41秒	140度 50分 58秒	20000925～ 20001025	140㎡	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物		特記事項		
西崎山ストーン サークル	配石遺構	縄文時代 後期	2・3・ 4区で配 石遺構が 確認され ている (発掘調 査済のも のを含 む)	縄文時代後期・晩期 の土器、黒曜石の剥 片		3・4区に未調査の 配石遺構が存在する		

北海道立埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書 第1集

西崎山ストーンサークル

平成13（2001）年3月30日発行

編集：財団法人北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1

TEL：（011）386-3231

FAX：（011）386-3238

印刷：富士プリント株式会社
